

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
迫内祐司（小杉放菴記念日光美術館学芸員）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
西山純子（千葉市美術館学芸員）	三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
森 登（学藝書院）	山田俊幸（元帝塚山学院大学教授）
樋口良一（版画堂）	
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (8)

【こ】(後半)

小島沖舟(こじま・ちゅうしゅう)

武内桂舟門下。少年向け雑誌の挿絵で活躍。『木版口絵総覧』には江見水蔭『水の魔術』(嵩山堂 1900)、内田魯庵『霜くずれ』前・後編(春陽堂 1902)が挙げられている。博文館の雑誌の挿絵画家として活躍し、特に『少年世界』の読物挿絵、日露戦争もの挿絵でも活躍。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005) (岩切)

小島一谷(こじま・いっこく)

木版画《吉田橋の夕》(13.7 × 19.5 cm)を制作。昭和初期頃と思われる。作品の形状から、鈴木樸水らとの東京風景版画シリーズの中の一枚か。【文献】『山田書店新収目録』58(2003冬) (樋口)

児島喜久雄(こじま・きくお) 1887～1950

1887(明治20)年10月10日紀州藩出身の陸軍軍人・児島謙謙の5男として東京に生まれる。15・16歳の時、藤島武二が選者を担当していた雑誌『明星』の応募挿絵に入選、図版が掲載される(1902年第2・3号、1903年第1号)。それと相前後して、1903年水彩画家三宅克己に入門、2年間ほど画技を学ぶ。学習院初等科時代から里見淳と交わり、1908年には里見らの回覧雑誌『麦』に参加。1909年10月頃には里見と共に、同年4月に来日したバーナード・リーチを訪ね、リーチからエッチング技術を学び、1909年から翌年にかけて《父の像》《自画像》《描写 ハンス・オルデ「ニーチェ像」》《描写 レンブラント「シクスの橋」》《風景》《樹木に見える風景》《村の中の道》などを制作する。1910年の『白樺』創刊に参加し、創刊号の表紙絵を描く。1914年第1回二科美術展覧会には《平日》(油彩)が入選する。その一方、1909年東京帝国大学文科大学文学科に入学。1913年哲学科(美学専修)を卒業した後、1921年に学習院教授となり、同年7月から1926年まで欧州留学。留学中に太田正雄(木下李太郎)と画技を磨き、滞欧ノートに多数のルネサンス絵画を描き写す傍ら、ルーブルに通いレオナルド・ダ・ヴィンチ《聖母子と聖アンナ》の背景部分を油彩模写している。滞欧中に東北帝国大学助教授となり、帰国後の1935年より東京帝国大学助教授を兼任。1941年東京帝大教授、1948年退官。1950(昭和25)年7月5日逝去。美学・美術史の研究者としては、特にレオナルド・ダ・ヴィンチ研究で知られ、澤柳大五郎・三輪福松ら多くの研究者を育てている。美術史研究の傍ら絵画制作を続け、1936年には安井曾太郎にエッチング技法を教え、安井は1938年の雑誌『丹青』第1巻第2号に銅版作品《親子》を掲載する。1941年から1943年にかけて細川護立の発案による「横山大観を描く会」に、小林古径・安田靉彦・安井曾太郎・梅原龍三郎と参加。この折、児島の描いた《横山大観素描》は、「この水戸志士の気骨をもつ傲兀の画人の気魄に迫っているところ、四画伯の本絵にゆめ劣らぬ」(澤柳大五郎・参考文献)もので、画家たちの大観への遠慮とは異なり、真をついた素描作品は、研究者の余技に止まるものではない。【文献】『児島喜久雄画集』(用美社 1987) (森)

小島忠三(こじま・ちゅうぞう)

陸地測量部に勤める銅版による地図製作者。1932(昭和7)年第2回日本版画協会展に《一本の木のある風景》(銅版か)が初入選。その後、1936年の『エッチング』第40号(1936.2)に銅版画《草むしり》の図版が掲載され、「彫刻銅版」と題する論文も第40～43・45・49号(1936.2～5・7・11)の6回に分けて掲載された。また、同年(1936)の第5回日本版画協会展にも銅版画《水辺》《海(夕)》が入選。1941年には第2回日本エッチング展に《風景》が入選。『エッチング』102号(1941.7)には自身の地図製作の仕事に触れた「現代文化の影武者」を寄稿している。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『エッチング』39～43・45・49・101・102 (三木)

小島真佐吉(こじま・まさきち) 1914～1986

1914(大正3)年山形県に生まれる。本名は政吉。のち小樽に転居。1932年上京し、川端画学校に学び、後に二科会会員の栗原信に師事する。1935年第1回小樽青年美術協会展に出品。1937年第14回白日会展に油彩画《静物》が初入選。以後、1951年の第27回展まで毎回出品。その間、第17回展(1940)で船岡賞受賞し、第18回展(1941)から会友、第21回展(1943)からは会員として出品したほか、1939年の第1回聖戦美術展、同年の第26回二科展から1942年の第29回二科展に入選。版画は1938年の第7回日本版画協会展に木版画《十和田湖》が入選しているが、これ以外の活動は不明。戦後は、白日会展のほか、1946年の第2回日展と1950年の第6回日展にも出品。また、1946年に札幌で開かれた第1回全道美術協会展で会友、翌1947年の第2回展で会員に推挙された。1952年以降は二紀会に同人として出品するようになり、第8・9回展(1954・1955)で連続して同人賞を受賞し、1956年に絵画部委員に推挙されている。1983年の第37回二紀展で文部大臣賞受賞。1986(昭和61)年東京都で逝去。【文献】『第七回版画展目録』(日本版画協会 1938) / 『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984) / 今田敬一『北海道美術史 地域文化の積み上げ』(北海道立美術館 1970) / 『北海道美術の青春期 1925～1945』図録(市立小樽美術館 1999) (三木)

腰本 健(こしもと・けん)

1922年関西学院の美術部「神戸弦月画会」が主催する創作版画展(2.23～26 三宮三〇九番館)に銅版画《橋際》《上鳴尾》を出品。出品時は、大阪に住む。【文献】『創作版画展覧会目録』(神戸弦月画会 1922) (三木)

古城江鏡(こじょう・こうかん) 1891～1988

1891(明治24)年5月18日鹿児島県出水郡高尾野町に生まれる。本名三之助。幼時より絵を好み、1913年頃帰郷した黒田清輝に自作を見せ、助言を得て上京、福井江亭を紹介されて入門。後に山元春挙にも学ぶ。1918年第12回文展で日本画《社壇詣で》が初入選。1921年にも第3回帝展で《筏二題》が入選。1923年秋に出国、台湾を皮切りに諸国を巡り自作を展覧、東南アジアやインド、エジプト、ヨーロッパ、アメリカを訪れて1933年帰朝。滞仏中にはサロン・ナショナルやサロン・ドートンヌに出品している。版画については、帰国後、外遊時のスケッチを木版画にした仕事知られる。当初全100点を構想

したと見られ、同時代の資料に「世界百景と風俗の、第一輯作成の計画に着手、豪華版を発行することになった」とあり(『中央美術』復興25 1935.8)、1935年10月末に頒布会のための作品が完成する見込みとの記事もある(『美術通信』180 1935.10.13)。この時完成したのが「世界風景及風俗版画 第一輯」として伝わる、おそろは10枚組の作品で、画中の文字などからタイトルを拾うと《於而ロンドン》《和蘭 アムステルダム》《ダージリンの娘》《LONDON》《爪哇市場》《印度ヴェナレス》《羅馬にて》《香港ニテ》《Monterey of American》《独逸ワンゼー風景》となる。いずれも限定150部、彫師は山岸主計、摺師は漆原栄次郎。江観の版画については情報が乏しく、予定された100点が完結したか、あるいは第一輯のみで終了したかは不明。1938年より従軍画家として中支や海南島を訪れ、1943年日本版画奉公会会員。同年無所属日本画家連合結成。1944年3月より市原市に住み、1988(昭和63)年10月25日同市にて逝去。【文献】古城江観『南を描く』(大雅堂 1943)／野田正明編『福岡県日本画 古今画人名鑑』(古今画人名鑑刊行会・筑後画廊 1987)／『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録(徳島県立近代美術館ほか 1998)／『巴里憧憬—エコール・ド・パリと日本の画家たち』(徳島県立近代美術館ほか 2006) (西山)

小代鎮利(こしろ・しげとし)

1933年8月大分県師範学校において講師平塚運一による第2回版画講習会が行われ、主催した武藤完一はこの講習会を機にそれまで発行していた版画誌『彫と摺り』を『九州版画』と改題(「編集後記」『九州版画』1 1933.9)。講習会参加者の作品をその第1号(1933.9)に掲載した。小代の『洗濯』も掲載されていることから、講習会に参加したものと考えられる。後日、平塚はこの作品について「一種の雅致があって面白いが、水の表現に何か一工夫あった方がよかったらう」と武藤完一に感想を寄せている。第2号(1934.1)には『初日の出』を発表。また1934年夏には、大分県師範学校において第6回夏期図画講習会として行われた「大分師範エッチング講習会」(1934.8.1～5 講師：西田武雄)にも参加している。当時、大分県西大野北部小学校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『エッチング』22(1934.8)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小杉放菴(こすぎ・ほうあん) 1881～1964

1881(明治14)年12月29日栃木県上都賀郡日光町(現・日光市)に生まれる。本名国太郎。1896年五百城文哉の内弟子となる。1899年小山正太郎主宰の不同舎に入門。この前後から「未醒」と号す。1904年近事画報社の特派員として日露戦争に従軍し、雑誌『戦時画報』に写生画や記事を通信。太平洋画会展へ戦地に取材した作品を出品する。帰国後反戦詩を含む『陣中詩篇』を発表。1905年9月石井柏亭・山本鼎らと美術文芸雑誌『平坦』を創刊。この頃から、雑誌『新古文林』『天鼓』『文章世界』や新聞各紙にコマ絵を寄せ、これらは『漫画一年』(1906)、『詩與画趣』(1907)、『漫画天地』(1908)、『漫画と紀行』(1909)などにまとめられ、いずれも木版画で出版されている。山本鼎らの『方寸』(1907創刊)には、1908年5月の第2巻第4号から同人として参加する。この年から文展に洋画を出品し、1911年第5回展《水郷》、

1912(大正元)年第6回展《豆の秋》で、実質的な最高賞である2等賞を連続受賞した。1913年にヨーロッパ留学。1914年横山大観らと日本美術院を再興し、同人として洋画部を牽引していったが、1920年洋画部同人らと連袂脱退する。このメンバーを中心に1922年春陽会を結成し、以後、晩年まで同会のリーダー的存在として活躍したが、制作の比重は日本画のほうに重きが置かれていった。1923年より「放庵」と号す(1933年末から「放菴」と署す)。1925年東京帝国大学安田講堂の壁画を制作。1945(昭和20)年新潟県新赤倉の別荘に疎開し、この地に永住する。1964(昭和39)年4月16日逝去。

小杉放菴には、「新聞雑誌の版画」(『黒白』2-2 1909.3)、「絵師と版画彫刻師と接近すべし」(『美術之日本』3-10 1911.12)という版画論と、「応用美術講話 版画に就いて」(『正則洋画講義』日本美術学院1912)という、石版・木版・銅版・デズク版・写真版・三色版の技法解説がある。これらは20代からコマ絵に数多く携わってきた画家による、原画と版との関係についての実感のこもった意見で、いずれも他刻他刷りの方法論である。歌麿の時代とは違い、現在の版画は、画家と製版職工が別々に仕事をしているため、絵と版が離れ離れになってしまっていると小杉はいう。そして、画家は版のことを考えて描き、製版職工も絵を理解する程度の知識を持ち、画家と職工との距離を接近させなければならぬと説き、山本鼎は自分の絵を自分で製版するので、版画としては理想的だと語った。小杉に自刻自刷の作品はほとんどなく、例外的に、アダムとイブをテーマにしたらしい、「大正元年八月作」と年記のあるエッチングの存在が1点知られている。小杉は1911年の白樺主催泰西版画展を見て、職工を経ずに表現できるエッチングへの関心を深めたらしく、これを学ぶ過程で実験的に作られた作品だったと思われる。その後に原画を手がけた木版画として、故郷の鳥瞰図である《新日光絵図》(1912)や《日本風景版画 第七集 琉球之部》(日本風景版画会 1918)、自著『支那画観』口絵(1918)、中沢弘光との連名による《満洲図絵》(ジャパントーリストビューロー 高見沢版 1934)などがある。『美之国』第3巻第6号(1927.8)の広告に、村幸商店から出版予定の「創作錦絵」シリーズ揮毫者として小杉の名が挙がっているが、これは未刊に終わったとみられる。なお、1933年に出版した『放菴歌集』は、箱・本体の装幀を中川一政が、扉の題字を木村莊八が手掛け、野村俊彦が木版にしたものだった。【文献】『小杉放菴画集』(日本経済新聞社 1988)／『創作版画の誕生』展図録(渋谷区立松濤美術館 1999)(迫内)

小谷方明(こたに・みちあき)

青森創作版画研究会夢人社発行の『趣味の蔵書票集』第4回(1939)に蔵書票《無題》2点を発表。著作『蔵書票の話』(小堀弘編発行 1979)を上梓。1939年当時、大阪市西区西道頓堀5の7島治商店に住所を置いている。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)(加治)

児玉 篁(こだま・こう) 1901～没年不詳

1901(明治34)年長野県松代に生まれる。本名は武雄。本郷洋画研究所に学ぶ。版画は独学と思われるが、1927の第8回帝展に木版画《盆踊り》が初入選。翌1928年の日本創作版画協会第8回展に《葬》、第9回帝展に《送り火》がそれぞれ入選。1930年には神戸の版画誌『H A

NGA』第16輯(山口久吉主宰 1930.4)に《巖頭波》を発表。また同年、荒井東留・永礼資朗と版画誌『刀の跡』(1930～1932 5冊か)を創刊し、第1輯(1930)に《風景》、第3輯(1931)に表紙絵と《蒸風呂にて》《大島にて》《電車通り》、第4輯(1931.11)に《郊外》《影》《夏》を発表したことが確認されている。1931年には版画誌『きつつき』第3号(中島重太郎編 1931.6)に《面》を発表。同年(1931)の日本版画協会第1回展に《藻草採り》、翌1932年の第2回展に《水郷夕照》、1933年の第3回展に《雪》がそれぞれ入選。また、1932年の第10回ロサンゼルス・オリンピック芸術競技に《ラグビー》、1936年の第11回ベルリン・オリンピック芸術競技にも《跳ぶ》が入選した。1935年頃の住所は東京市淀橋区下落合462。【文献】『昭和十一版 日本美術年鑑』(美術日報社 1936)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／桑原規子「日本近代版画的海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—」『(平成17～19年度科学研究費補助金(基礎研究(C)研究成果報告書』(2008)／『創作版画誌の系譜』(三木)

児玉貞平(こだま・さだへい) 1898～1941

1898(明治31)年大分県に生まれる。葵橋洋画研究所に学び、1927年の第8回中央美術展に油彩画《洗足風景》が初入選。続いて翌1928年の第3回1930年協会展に《参道風景》《白日》が入選。同年開設された「1930年協会研究所」にも通い、1929年の1930年協会第4回展と第10回中央美術展、1930年の第5回展1930年協会展に入選。また1931年からは独立美術協会展に出品するようになり第1・2・5・7～11回展(1931・1932・1935・1937～1941)に入選したほか、1933年の第8回白日会展、1935年の第12回白日会展に油彩画を出品した。版画は独学で習得したと思われが、石版画を主とし、木版画も手掛ける。1929年の日本創作版画協会第9回展に石版画《裸婦読書》《山手の工場》が初入選。同年の白日会第6回展に版画《平壤乙密台》(石版か)と油彩画《芝浦風景》《冬の日》、日本水彩画会第16回展に《雨の丸ビル》(石版)を出品。藤森静雄は「児玉貞平君の『雨の丸ビル』は石版であつた。石版とは思へない柔かい線の動きを面白く思つた」(『日本水彩画展版画小感』『版画 CLUB』第1年第2号)と評している。翌1930年の第7回白日会展に版画《町の夕》(石版か)と《橋》(油彩画)《蟹》(種別不明)、第17回光風会展《花》(石版画か)、1931年の第8回白日会展に版画《花》(石版か)を出品。その後、同年(1931)に新発足した「日本版画協会」に会友として参加。その第1回展に《椿花》《丸の内午後》(各石版、以下も同じ)を出品。翌1932年会員に推挙され、同年の第2回展に《夜の京橋》《京城郊外》《道頓堀スケッチ》、第3回展(1933)に《雨》、日本現代版画とその源流展(パリ装飾美術館 1934)に《La Pluie》(1933)、第4回展(1935)に《風景(夜)》《風景(午後)》、第9回展(1940)に《雨神山》を出品した。1941(昭和16)年8月20日東京で逝去。その後、同年の1941年の第10回日本版画協会展に1928年の《精進湖の富士》(石版)から1940年の《雨神山》(石版)までの遺作19点(石版画16点・木版画2点・モノタイプ1点)、翌1942年の独立美術協会第12回展に遺作の油彩画《岩塊》が並んだ。【文献】『日本水彩画会第十六回展覧会目録』(1929)／『白日会展

総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／桑原規子「日本近代版画的海外紹介とその国際的評価に関する研究—昭和初期から占領期まで—」『(平成17～19年度科学研究費補助金(基礎研究(C)研究成果報告書』(2008) (三木)

児玉武雄(こだま・たけお) → 児玉 篁(こだま・こう)

児玉政敏(こだま・まさとし)

大分ではじめての版画講習会は創作版画倶楽部主催、講師平塚運一により1931年8月3～7日に大分県師範学校で開催された。開催を記念して武藤完一は版画誌『彫りと摺り』(1931～1933)を創刊(編集後記『彫りと摺り』創刊号)。児玉はこの講習会に参加し、講習会での制作作品《煙突》はその第1号(1931.9)に掲載されている。以後第2号(1931.11)に《杵原神社》、第3号(1932.1)に《松の上の猿〔賀状〕》、第4号(1932.6)に《村の石仏》を発表。当時、児玉は大分県大野郡菅尾校の教員として勤務しており、地元大野郡で発行された版画誌『大野版画』第1号(1933.12)にも《登校の山路》を発表している。【文献】『創作版画講習会』『郷土図画』1-5(1931.10)／『版画 CLUB』3-1・2(1931.8・9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小塚一星(こづか・いっせい)

1933年に開催された西田武雄主宰の日本エッチング研究所第1回エッチング講習会(8.1～3 募集人員30名、参加者13名)に参加。当時横浜壽小学校勤務で、同校からは小塚の他に安齋三郎など4名が参加。【文献】『エッチング』10(樋口)

小塚義一郎(こづか・ぎいちろう) 1888～1973

1888(明治21)年静岡県に生まれる。1912年東京美術学校図画師範科卒業。1916年文部省の図画講習会修了。群馬県立高等女学校教諭を経て、1922年に山形県師範学校の図画教師となる。同時期に京都高等工芸学校を卒業して県立山形工業学校の図画教師となった為本自治雄と出会う。二人で山形に初めての公募洋画展を開催するため、当時開設されたばかりの山形高等学校で文芸活動をしていた今泉篤男(後に美術評論家となる)、山形県師範学校生の奈良村正史・逸見誠一・石澤健吉に呼びかけて6名で洋画グループ「毒地社」を結成する。1922年9月山形における初めての公募洋画展を開催し、公募展はその後数度開催されたという。このグループから、後に日展で活躍する菅野矢一や牧野柿五郎などが輩出した。小塚は1933年頃にはエッチングプレス機を所有しており、西田武雄を招いて1935年8月25日に山形県師範学校で版画講習会を開催する。講習会には角張完壽(専攻科)・富樫徳太郎(5年)・羽角信治(3年)・木村五郎(2年)・細谷敏雄(2年)の学生5名が参加した。『エッチング』35号(1935.9)に富樫徳太郎の作品と小塚の「エッチング感」が掲載される。小塚は1939年〔4月〕山形県師範学校から静岡県不二高等女学校へ転任。静岡県画壇で官展派として活躍したとされるが、その後の消息は未確認。1973(昭和48)年に逝去したと思われる。なお、『日本の美術展覧会記録1945-2005』(中島理壽監修 国立新美術館)によれば、1974年に山形美術博物館において「小塚義一郎・為本自治雄遺作展」(4.5～22)が開催されて

いる。【文献】『エッチング』7・10・35・79／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』（ぎょうせい 1992）／『平成21年度特別展 毒地社とその時代』パンフレット（山形大学附属博物館 2009.11）（樋口）

小塚省治（こづか・しょうじ） 1901～1942

1901（明治34）年に生まれる。1940年に刊行された著書『沖繩帽子沿革略史』（沖繩パナマ帽子神戸同業会）では肩書きが服部長商店副支配人となっており、小塚は貿易を仕事とする商社マンであった（蔵書票作家の中田一男による）。1933年に日本蔵書票協会を設立し、わが国の蔵書票を海外に紹介すると共に外国の蔵書票を国内に紹介するため、蔵書票専門雑誌『蔵書趣味』（1933～1938）を創刊。毎号実物の蔵書票を貼り込み、文献、協会記事、各国蔵書界のニュースと解説を付して掲載。貼り込み用の蔵書票を30枚～60枚募集した（実際の募集数不明）。協会は蔵書票の使用を奨励し、また会員から書票主を募った。その年に制作された蔵書票を『日本蔵書票協会年報』（1934～1936）として刊行。特製会員本や上製頒布本などの『日本蔵書票協会蔵書集』（1933～1939）も出版している。1936年当時の住所は兵庫県〔武庫郡〕魚崎町横屋（『会員名簿』『趣味の蔵書票集』1 1936.9）。仲間内では小塚は書票狂で作者ではないといわれていたが、仕事をしながら、ライフワークの蔵書票蒐集に多忙な毎日の中で、蔵書票を制作している。青森の佐藤次郎との交流から、夢人社が発行した版画誌『陸奥駒』第18集蔵書票号（1935.7）に蔵書票を発表。同じく夢人社が発行した『サトー・ヨネジロー蔵書票集』（第1年）1-夏の集（1934.8）から第3年第3・4集 秋冬の集（1936.12）まで毎号1～3点の蔵書票と蔵書票に関する小文「蔵書票凶案の新傾向」などを寄稿している。それ以外にも夢人社の『趣味の蔵書票集』第1回（1936.9）に《つばき》や《裸婦》、第2回（1937.8）に3点、第3回（1938.6）に1点の蔵書票作品を発表。1938年の阪神大洪水により自宅が被害を受けたことや戦時下の諸用紙統制などの悪条件が重なる中、自身の健康を悪化させ、1942（昭和17）年2月16日心臓病のため西宮市常盤町12番地の自宅で逝去。出版の仕事には『芸術版画二見ル蔵書票』（日本蔵書票協会 1938）の編集や著書の『国学者友安三冬の蔵書票と緑山・浄業室の蔵書票』（日本蔵書票協会 1937）などがある。【文献】『日本読書新聞』（1942.3.2）／佐藤次郎「回想の書票人」『現代日本の書票』（文化出版局 1978）／伊藤隆信「小塚省治」（『日本書票協会通信』113 2000.10）／原野賢吉編『日本蔵書票書目』（日本蔵書票協会 2000）／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）（加治）

小手川清春（こてがわ・きよはる）

昭和初期頃か、エッチング《『裸婦』》を制作。この作者と同一人かは不明だが、秋田市出身の小説家・伊藤永之介（1903.11.21 生）の妹清子の結婚相手に小手川清春がいる。伊藤の追想によると、小手川は新人画家として将来を囑望されながら結核で斃れ、妻清子も感染して若死にしたという。小手川の活動の記録としては、昭和前期のダンス雑誌『ザ・モダン・ダンス』第3巻第1号と第2号（社交ダンス 1935.1・2）に表紙絵を描いている。詳細は不明。【文献】『武藤完一コレクション』／「人・その思想と生涯（22）」『あきた』66（1967.11）（樋口）

後藤羽山（ごとう・うざん）

青森創作版画研究会発行の版画誌『彫刻刀』第7号（1932）に《海》を発表。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

後藤彰平（ごとう・しょうへい）

1938年に岐阜県高山で創刊された版画同人誌『版糸』（ひだ版の会）第3号「詩 童版号」の表紙絵を担当し、同号に木版画《きょうり》《海水浴》を発表。その後、1940年の造型版画協会第4回展に木版画《猫》《飛騨の雪》、翌年の第5回展に《水車小屋のある風景》《たまり店の一部》が入選。第4回展の入選作については北川桃雄の展評があり、「△雪景の方が纏まつてゐるし、前景の枝も版画的に成功した。／賛成。雪景の方がいゝ。「猫」は形が拙い。雪景は色も単調だし、描写に左う新味はないが、まじめな作風だと思ひます」（『浮世繪界』5-7）と評されている。また、1941年の第10回日本版画協会展に木版画《庭》を出品。出品時は、高山に住む。【文献】『造型版画協会第四回展目録』（1940）／北川桃雄「現代の版画—造型版画展評」『浮世繪界』5-7（1940.7）／『造型版画協会第五回展目録』（1941）／『日本版画協会第10回展目録』（1941）／『創作版画誌の系譜』（三木）

後藤忠雄（ごとう・ただお）

青森創作版画研究会発行の版画誌『彫刻刀』第2号（1931）に《風景》、第3号〔1931〕に《舟人》、第4号〔1931〕に《魚河岸へ行く女》、第5号〔1931〕に《初冬の浜》、第6号〔1932〕に《蔵書票》《早春》《海の雪》《凍る港》、第8号（1932）に《海辺》、第10号（1932.5）に《工場》を発表。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録（青森県立郷土館 2001）／『創作版画誌の系譜』（加治）

後藤忠光（ごとう・ただみつ） 1896～1986

1896（明治29）年3月24日秋田市に生まれる。旧制秋田中学校を卒業後、本郷洋画研究所に学ぶ。1920年未来派美術協会第1回展に水彩画（推定）を出品。井上富峰・城山吐峰・大場清らと青美社をつくり（後藤が主宰）、1921年4月に詩と版画の同人誌『青美』を創刊。《ラッシアンナショナルダンス（ロシア、クルピン氏舞踏）》《地上に踊る》《壺》《抒情》（以上、木版画）を発表したほか、ブルリュークとパリモフがその作品を将来したロシア未来派の画家、パーヴェル・リュバルスキーのリノカットの原版を木下秀一郎から借りて刷り、同誌に挿入した。1922年の日本創作版画協会第4回展に出品。関東大震災後に一旦郷里の秋田に帰り、1924年4月に秋田県出身の画家らと第1回秋田美術展覧会を開催、その一方で「千秋軒」という食堂をマヴォ風に奇抜に装飾して話題を集めた。翌1925年には二人展を開催し、自分の版画、水彩画、図案、看板絵のほかに、青美同人らの版画も出品した。また第2回秋田美術展覧会にも出品した。この一方、秋田滞在時には『秋田魁新報』にしばしば挿絵を描き、雑誌の表紙絵、案内チラシ、カフェのメニューやマッチラベルの図案などを制作していた。1926年に再上京し、図案家として生計をたてながら版画も制作した。戦後は旺玄会や日本版画会（日版会）の会員となり、新槐樹社創立にもかかわった。1986（昭和61）年埼玉県鳩ヶ谷市で逝去。【文献】滝沢恭司「大正期モダニズムの一枝一末

来派美術協会々員後藤忠光と『青美』について』『町田市立国際版画美術館紀要』3 (1999) (滝沢)

後藤正治 (ごとう・まさはる)

1933年7月台南師範学校教諭の山本磯一氏宅で開催された台南エッチング講習会(24日)には7名が参加し、後藤も名を連ねる。当時、台湾の南門小学校に勤務。【文献】『エッチング』10 (樋口)

後藤芳景 (ごとう・よしかげ) 1858～1922

1858(安政5)年大阪に生まれる。本名は後藤徳次郎、師は中井芳瀧。1910年時点で54歳。大阪市南区在住。早いものでは、1886年に名古屋の絵入扶桑新聞附録『金鏡紀聞 惟尾美代葵松葉』(浮川舎栗爪著)の表紙絵・挿絵を描いている。主に関西での錦絵、新聞・雑誌の挿絵活動が知られる。1896年には文事堂発行の講談本口絵、『徳川十五代記』全7巻(桃川燕林講演・今村次郎速記 1879)などの活動もある。『木版口絵総覧』には、文事堂の他に、1896年の三宅青軒『宝の鍵』(青眼堂)、1897年の三宅青軒『怨めしや』(松声堂)、1902年の村上浪六『男山』前・後編(駸々堂)が挙がっている。【文献】「現今浮世絵師(九)『此花』第11枝(1910.11.1)／山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005) (岩切)

後藤良亮 (ごとう・りょうすけ)

1937年8月に行われた広島創作手工協会主催第9回講習会(2～6日)の一環として、同月5・6日の両日に開催された西田武雄を招いたエッチング講習会に参加する。当時、呉市男子高等小学校に勤務。また1939年8月に開催の浅井清主催第2回呉版画倶楽部展にも出品歴がある。【文献】『エッチング』59／『日本版画協会会報』31(1939.9) (樋口)

後藤林之助 (ごとう・りんのすけ)

名古屋の代表的浮世絵版画家としても知られ、自ら版下絵の筆を執っている。1936年3月創刊の『浮世絵界』(浮世絵同好会)掲載の「後藤版画家・後藤林之助」広告に「店内新装常設展観即売相始め申候相変わらず御願上候」とし、住所は「名古屋市中区大阪町一の六十」である。版画作品としては、1930年に版元・中村善三郎(隅田町四番地)から名古屋市内及び周辺の景勝地を描いた木版多色摺の大判横絵風景版画(中京堂刻、《中村公園大鳥居》《名古屋城》などで何点制作されたかの詳細は把握されていない)を制作。また同じころと推定される木版多色摺『名古屋八景』(《別院春霞》《八事晚鐘》《名港帰帆》など。なお、『名古屋八景』シリーズはオフセット印刷で「名古屋毎日新聞社選定」の刷り込み入り、新聞附録として1930年3月1日発行されたものが存在する。【文献】樋口良一編『版画家名覧』(山田書店版画部 1984) (岩切)

琴塚英一 (ことづか・えいいち) 1906～1982

1906(明治39)年11月14日大阪市に生まれる。岡本大更に日本画を、信濃橋洋画研究所で洋画を学ぶ。1924年第1回大阪市美術協会展に日本画《地上の春》が初入選。同年の第10回大阪美術展、翌年の第2回大阪美術協会展にも入選。1927年京都に移り、京都市立絵画専門学校で日本画を学ぶ。1930年同校を卒業。同期に亀井英一(藤兵衛、のち玄兵衛)がいる。木版画は独学と思われるが、卒業後は版画家としての活動が先行す

る。京都での活動は、1931年の第2回京都工芸美術展に《少女座像》、翌年の第3回京都工芸美術展に《港内》、第1回関西創作版画展に《五月晴》《少女像》、1933年の第3回京都創作版画会展に《五月晴》など4点を出品。また、会期は不明(1930頃か)だが、京都創作版画会第2回展に《花と子供》を出品している。1935年には徳力富吉郎・亀井藤兵衛との共作『花五十題』(全10集 芸艸堂)を発表。また、同年の京都市展の第1回展に《鴛鴦》《人形と造花》が初入選。以後、第2回展(1937)に《魚菜》、第6回展(1941)に《椿花》(授賞)、第7回展(1942)に《源平武者絵》《鬼ヶ島》、平安神宮御鎮座五十年平安遷都千五十年奉祝京都市美術展(1944)に《燕子花》を出品した。一方、全国的な公募展では、春陽会展への出品が一番早く、翌1932年の春陽会第10回展に《五月晴》が初入選。以後、第15回展(1937)に《菜魚》、第16回展(1938)に《絵馬》、第20回展(1942)に《加茂の娘》を出品。官展へは、1934年の第15回帝展に《ラ・ボエーム》が入選。文展無鑑査展(1936)に《花》、第2回新文展(1938)に《蛤御門》(武藤完一は型紙版ではないかという)、第3回展(1939)に《新秋》、紀元2600年奉祝展(1940)に《初秋》を出品。日本版画協会へは、1935年の第4回展に《人形と造花》《鴛鴦》が初入選。1938年に日本版画協会会員に推挙され、翌年1939年には『新日本百景版画』のうち《奈良東大寺大鐘楼》を制作。1941年の第10回展に《椿花》、翌年の第11回展に《鬼ヶ島》を出品している。一方、日本画家としての活動は、版画に比べやや遅れ、1938年からは「青龍社」を発表の場とし、同年の第10回展に《戦ヒ》(二曲屏風)を出品。以後、第12回(1940)を除き、1944年の第16回展まで出品。その間、第14回展(1942)で奨励賞、第15回展(1943)でY氏賞受賞した。戦後は、1950年に青龍社社人になっているが、1965年の第37回展まで出品。また、第1～3回現代日本美術展(1954・1956・1958)、第3～5回日本国際美術展(1955・1957・1959)などにも招待出品。1966年の主宰者川端龍子の逝去による「青龍社」の解散後は、美術団体に属することはなく、個展を中心に活動を続けた。また、版画は戦前のような公募展への出品は無く、1948年に亀井玄兵衛・徳力富吉郎・高橋太三郎との「紅緑社」を結成や、1951年の京都版画協会第1回展、1957年日米版画名作展(6.29～7.11 京都・丸物)などへの出品が確認できる。1982(昭和57)年2月21日京都で逝去。【文献】『第二回京都工芸美術展覧会出品目録』(1931)／『第三回京都工芸美術展覧会出品目録』(1932)／武藤完一「第二回文展の版画を見る」『エッチング』72／岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)／『百年史 京都市立芸術大学』(1981)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

小西 治 (こにし・おさむ)

1921(大正10)年の第3回日本創作版画協会展に木版画《静物》《小供》を出品。出品時、大阪に住む。【文献】『(第三回)日本創作版画協会版画展覧会出品目録』(1921) (三木)

小西次郎 (こにし・じろう)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇

都宮高等学校) 在学中に、長谷川勝三郎ら同校生徒による版画誌『刀』(1928～1932)の創刊に参加し、1929年に同校を卒業するまで作品を発表し続ける。第1輯(1928)に《時計》、第2輯(1928)に《夕景》、第3輯(1928)に《提灯行列之図》、第4輯(1929)に《エキスリブリス》3種を発表。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

古仁所 卓(こにしよ・たく)

古仁所が主宰するプロレタリア美術系の版画研究誌『爆竹』は、創刊号から3号が未確認。そのため、発刊の経緯は不明であるが、確認できた第4～7号(1929～1930)の編集後記をみると「プロレタリア版画の確立を目指して、美術界における結束された版画の集団でなければならぬ」との主旨を掲げての創刊であったと思われる。発行所を古仁所の自宅(東京府下巢鴨1310)にしているところから、古仁所は同人の中でも編集の中心的な仕事を担っていたと考えられる。作品は第4号(1929.10)に《弁慶橋(東京八橋之四)》、第5号(1930.1)に《夜明けの聖橋》、第6号(1930.3)に《スケート場》を発表。第4号掲載記事、田中比左良の「3号を見て」によれば、確認できなかった第3号(1929)に《若草》《橋》が発表されていたことがわかり、《若草》については「空の摺りは面白い。だが力を用ひて版画としてのより以上の効果を表はして貰ひたかった。(中略)この人の神経的な彫り方から云へばもう少し正確にして貰ひたい」との批評がある。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

近衛忠磨(このえ・ただまる) ▶水谷川忠磨(みやがわ・ただまる)

木島櫻谷(このしま・おうこく) 1877～1938

1877(明治10)年3月6日京都に生まれる。本名文治郎。15歳で今尾景年に師事、「櫻谷」と号し、四条派の写実的な画風を学ぶ。1899年全国絵画共進会に出品の《瓜生兄弟》は宮内庁買い上げ、出世作となる。第1回文展(1907)に《しぐれ》で初入選、2等賞を受賞。以後、第6回文展(1912)まで連続受賞した。また第6回文展二等賞の《寒月》が朝日新聞紙上で夏目漱石に酷評されたことでも知られる。1918年京都市立絵画専門学校教授に就任。一時は京都画壇において竹内栖鳳とならび人気を博すが、その後は振るわず、1933年第14回帝展出品を最後に画壇から離れて衣笠村(その後妻偃や華岳など多くの日本画家が集まった)に移り住み、漢籍に親しむ生活を送る。1938(昭和13)年11月3日電車事故により急逝した。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921)に《大石親子、男山八幡宮に祈る》1図を制作。【文献】『日本美術年鑑』昭和14年版(美術研究所 1940)／『山田書店新収美術目録』81(2008春)(樋口)

小早川 清(こばやかわ・きよし) 1899～1948

1899(明治32)年8月29日福岡市博多に生まれる。はじめ南画家上田鉄耕に学び、19歳の頃上京して鏗木清方に師事。門下の集う郷土会に参加して腕をあげ、1924年の第5回帝展に《長崎のお菊さん》が初入選、以後第15回展までは毎回入選を続け、1933年の第14回展では《旗亭涼宵》が特選となる。1937年の第1回新文展より無鑑査。艶麗で時にエキゾチックな女性像を得意とし、官展を代表する日本画家として活躍した。

浮世絵の収集や研究でも知られ、自らも木版画を制作している。清方門には伊東深水をはじめ川瀬巴水や笠松紫浪・山川秀峰など版画を手がけた作家が多いが、小早川もその一人である。『浮世絵藝術』4巻3号(1935.3)に発表した文章「不知火」によれば着手は1927年頃というが、今日確認される作品としては、まずは1930年2月から翌年6月に下絵を制作した私家版によるシリーズ「近代時世粧」がある(《近代時世粧ノ内一ぼろ酔ひ》《同二化粧》《同三爪》《同四瞳》《同五黒髪》《同六口紅》、各限定100部)。ついで1932年に版元長谷川から《踊り》《唐人お吉》《ダンサー》を出版(同じく限定100部)。さらに渡邊より1934年頃《舞踏》を版行。渡邊版画店の『木版画目録』には続刊が告知されているが未確認。そして刊年は不明ながら(1933・34年頃とする資料が多い)高見沢から「美女三態」として《髪》《湯上り》《艶姿》を出版している。《艶姿》はモデルの名から「芸者市丸」と題されることが多く、《髪》には着物の色の異なる私家版もあるとされる。またこのシリーズは、高見沢の前身であり同時期に併存していた丹緑堂版としても世にでている。以上の13点が現在知られる版画作品であるが、代表作「近代時世粧」が示すとおり作風はいずれも妖艶かつ華やか、現代的な女性像を生き生きと写す。上述した「不知火」で「私は、今の動いている社会生きた人間、現前の風俗環境を書きたい。その点では昔の浮世絵師と同じ態度であります」と述べており、現代の浮世絵師たろうとしたその立ち位置が伝わる。戦後にも版画を制作したとする資料もあるが未確認。1948(昭和23)年4月4日東京都大田区で脳溢血のため急逝。【文献】小早川清「不知火」『浮世絵藝術』4-3(1935.3)／『木版画目録』(渡邊版画店 1935)／『丹緑』広告(高見澤木版社 1939～1941)／『日本美術年鑑 昭和22-26年版』(美術研究所 1952)／『近代日本美術事典』(講談社 1989)／榎崎宗重監修『秘蔵浮世絵大観 ムラー・コレクション』(講談社 1990)／『おんなえ 近代美人版画全集』(阿部出版 2000)／岡部昌幸『美人画家小早川清の閃光—新出の遺品に見る伊東深水との交流を中心に』『帝京史学』25号(帝京大学 2010.2)(西山)

小早川秋聲(こばやかわ・しゅうせい) 1885～1974

1885(明治18)年9月26日鳥取県日野町黒坂の光徳寺住職小早川鐵儼と元摂津三田藩主九鬼隆義の妹・幸子の長男として、神戸の九鬼隆義子爵邸内で生まれる。本名盈磨(みつまる)。「秋聲」と号す。日本画家小早川好古は弟。9歳まで神戸で過ごし、その後は光徳寺に帰るが、僧侶になることを嫌い、再び神戸の九鬼家に身を寄せる。1905年谷口香嶠に師事(逝去後は山元春挙に師事)。1909年京都市立絵画専門学校に入学するも、同年東洋美術研究のために中国へ渡る。1914年第8回文展に日本画《こだました後》が初入選。以降は文展・帝展・新文展に出品を続ける。京都に居住しながら、美術研究のために中国を始め、欧州・アメリカ・印度・エジプトなど海外へ頻りに旅し、異国情緒漂う作品などを描いて京都画壇で異彩を放つ。1931年満州事変以後、陸軍の囑託従軍画家として頻りに大陸へ渡り、1943年まで満州や中国、タイやビルマなど南方にも派遣されて多くの戦争記録画を描いた。画壇における代表的従軍画家として知られる。1938年大日本陸軍従軍画家協会理事となる(会長は横山大観)。代表作に《日本刀》(1939)、《國之楯》(1944)など。戦後は仏画を描き、日展委員を務めた。1974(昭

和49)年2月6日京都で逝去。版画の制作は、1935年〔木版画集〕『新興満州國五趣』(《延び行く満州野(赤い夕陽)》《明けゆく蒙古》《霊峰白頭山》など5点)と木版画《日本刀》(1940頃)《国旗ハ輝く》(京都伏見区銃後奉公会長東山区長依頼 マリア書房 1941)などがある。【文献】白石敬一「第2次世界大戦における日本の従軍画家に関する一考察—小早川秋聲を通して」『兵庫教育大学修士論文』(2003)／『日本の版画 1941—1950』展図録(千葉市美術館 2008)／『山田書店新収目録』24・50(1996・2003)／『日本画家 小早川秋聲 戦争の記憶』展図録(日南町美術館 2013)／『版画に描かれたくらしと風景』展図録(昭和館 2010) (樋口)

小林朝治(こばやし・あさじ) 1898～1939

1898(明治31)年1月10日長野県上高井郡須坂町に生まれる。本名は袈裟治(けさじ)。少年期より絵画を好み、「朝治」の号は1924年頃より使用する。1925年金沢医科大学眼科を卒業し、眼科教室助手を経て、1927年愛媛県吉田町町立吉田病院眼科医長として赴任する。同年4月朝治を中心に吉田町九曜会洋画展を開催し、油絵を出品する。また同年、畦地梅太郎が郷里の二名尋常小学校で開催した個展を見学し、刺激を受けるとともに、畦地との交流の中から創作版画への興味を深める。1929年吉田新報社からの依頼で、「吉田風物詩」を連載し、その挿図を木版画で描く。この仕事は朝治の本格的な版画創作活動の始まりと言える。1930年第5回国画会展覧会に木版画《無花果》が入選。以後、第7回展を除き、1938年の第13回まで毎回出品。同年(1930)9月愛媛県吉田町公会堂で個展を開催。1931年には『吉田新報』に連載していた木版画56点をまとめ版画集『吉田風物画帖』を出版する。同年7月に吉田病院を退職し、郷里である須坂町に眼科を開業。眼科医としての傍ら、第5回全信州素人美術展覧会(信毎展)に《鶴》が入選。以後、1938年の第12回展まで毎回出品。また、1931年第1回日本版画協会展に《木蓮》が入選。以後、1938年の第7回展まで毎回出品を続けた。1933年1月から自治新報社の「郷土風景句画聚」(句は粟生純夫)に作品を連載。夏には平塚運一を講師に迎えて版画講習会を開催し、その参加者を中心に「信濃創作版画研究会」(後の信濃創作版画協会)を設立。8月に同研究会より版画同人誌『櫟』1輯(11日発行、第7輯より事務局を小林朝治宅におき編輯責任者となる。また、同誌は一時休刊するが、現在なお発行を続けている)を刊行。10月には北澤博・杉原忠四郎らと美術団体「十人社」を結成し、第1回展を開催した。翌1934年再び平塚運一の講習会を開催。1936年には日本版画協会会員に推挙され、協会の『新日本百景版画』のうち《志賀高原夜雪》を制作する。また、同年のベルリン・オリンピック芸術部門に《スケート》が入選し、メダルを授与された。朝治の画題の中心は、生涯を通じて郷里須坂を中心にした信州風景であり、また創作者としての立場だけではなく、郷里須坂を基点に創作版画運動を興すとともに、自らも全国各地に起こった版画同人誌に積極的に参加している。1939(昭和14)年8月5日須坂町外の松川にて逝去。同年の第8回日本版画協会展には遺作15点が陳列された。なお、朝治が生存中にコレクションした多くの近代版画作品は、現在須坂市版画美術館に収蔵されており、近代版画研究の基礎作品群として重要な位置を占めている。【文献】「小林朝治追悼」『日本版画協会々報』31(1939.10)／『小林

朝治版画全作品目録』(小林創 1987)／『小林朝治版画作品集』(小林創 1991)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(河野)

小林 厚(こばやし・あつし)

長野県須坂で信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第1輯(1933.8)に《風景》、第2輯(1934)に《賀状》、第3輯(1934.7)に《ポスター》、第6輯(1935.4)に《賀状》を発表する。当時、長野市吉田小学校に勤務(『櫟』3 1934.7)。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」『臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館 1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小林永興(こばやし・えいこう) 1868～1933

1868(明治元)年9月東京に生まれる。山本姓で名は貞吉。17歳の時に小林永濯に入門し「永興」の名を受ける。富岡永洗の兄弟子にもあたる。見込まれて師の娘婿となり、1890年の師永濯病死に伴い、小林家を継ぐ。1894年日本青年絵画協会第3回共進会、翌年の第4回絵画共進会でも共に三等褒状を受ける。錦絵(多色摺木版画)日清戦争もの(大判、四つ切判等、小冊子表紙絵)や団扇絵があり、木版の摺物なども手掛けている。挿絵でも単行本、雑誌で活動し、少年ものでは、博文館「少年文学」シリーズの『二宮尊徳翁』(幸田露伴著)、『親の恩』(宮崎三味著)の木版の表紙絵・口絵が知られる。肉筆も巧みであったが、輸出用の木版錦絵や版本の復刻複製のための版下、とくに春画ものに、名を示さないが優美巧妙な技量があったと伝える。1933(昭和8)年2月13日逝去。墓は師永濯とともに世田谷区松原の正法寺にある。【文献】鈴木浩平「永興」『原色浮世絵大百科事典』2(大修館 1982)(岩切)

コバヤシ・エイジロウ(Kobayashi Eijirou)

1920年代頃、ジェームズ・ホイッスラーの油彩画《ノクターン 青と金色—オールド・バターシー・ブリッジ》(1872—75頃)に基づく木版画〔《夜の橋》〕の制作がある。その他に版元西宮興作から版画の出版があると伝えられるが、未見。なお、大正期に《大正少年双六》(『少年世界』22-1 附録 1915.12)、《少女画報双六》(1917.1)の原画や杉谷代水訳『アラビアンナイト』上下巻(富山房 1916)挿絵などを描いている小林永二郎と同一人かは不明。【文献】『LIGHT IN DARKNESS Women in Japanese Prints of Early Showa (1926-1945)』図録(Fisher Gallery of SouthernCalifornia 1996.4.20～5.7)(樋口)

小林かいち(こばやし・かいち) 1896～1968

1896(明治29)年11月1日京都に生まれる。本名は小林嘉一郎。1914年京都市立絵画専門学校へ入学したと伝えられるが、不明。1917年頃より、小林うたち(う多治)名で、図案の仕事に携わる。1922年豊田豊編の『京都図案家銘鑑』(近代美術工藝社)に裾模様の図案家小林歌治として載る。「うたち」は当然、「(竹久)夢二」を念頭にした雅号だが、この時期の図案の作風は、やはり京都図案といったものだったのだろう。

1921年頃から、しだいに時代のイマジユリィはヨーロッパの「表現派」を呼吸し始める。そしてその形象は、1923年の関東大震災で頂点に達する。表現派の不安定な

構図が、震災で現実と呼応したからでもある。小林うたちは、この時分に「京都京極さくら井屋」の主人と出会ったようだ。初めは、絵封筒の図案に「うたち」名ものがあり、それで紙ものの世界に入ったようだが、さらに震災で多少小型化した震災サイズの絵はがき集『鐘が鳴る』『宵の星』の制作に図案家として参加した。木版による絵葉書である。これが大きな転換点となった。さくら井屋の主人はちょうどその時分、「江戸版画」に魅せられていたようで、「長い昔から積みあげてきた技巧の上に新しい色彩は蘇りました。いろいろの詩の世界も美の世界もそこに新しい輝きを見せませう」と述べ、大正から昭和の時代にかけて、『現代的版画抒情絵葉書』を38冊刊行した。小林かいちの優品は、このシリーズ、また、この時期の絵封筒に集約されているとあってよい。

1940年頃から、かいちは小林嘉一郎の本名にもどり、染色図案の職人としての仕事に入る。晩年は、腕のいい図案職人として、京都の鷲見染工で、紙ものデザインの仕事とはまったく切り離された場で働き、染色図案家として、1968（昭和43）年12月15日京都で逝去。【文献】山田俊幸他編『小林かいちの世界』（国書刊行会 2007）（山田）

小林一三（こばやし・かずじ）

長野県安曇野地方の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』（1937～1938）を発行した。その第2号（1938.5）に《秋》を発表。当時、北安曇野郡北城小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

小林柯白（こばやし・かはく） 1896～1943

1896（明治29）年10月大阪に生まれる。本名茂雄。1912年上京して今村紫行、後に安田靫彦に師事する。1918年再興第5回院展に日本画《逢坂山》が初入選。以降出品を重ね1924年院展同人となる。その後京都に移り、京都画壇で活躍。1943（昭和18）年11月8日京都で逝去。門下に森田曠平がいる。版画は、京都の新進の日本画家を集めて刊行された木版画集『新進花鳥画集』（マリア書房 1931～1933）に《あやめ》1図を制作。【文献】『日本美術年鑑』昭和19・20・21年版（国立博物館 1949）／『20世紀物故日本画事典』（美術年鑑社 1998）／山田書店新収美術目録』81（2008春）（樋口）

小林喜一郎（こばやし・きいちろう） 1895～1961

1895（明治28）年高知県で生まれ、実家のある倉敷で育つ。1916年上京し、中川一政・安井曾太郎に師事。1921年の第8回二科展に油彩画《静物》《池袋堀の内風景》を出品し、初入選、1942年二科会会員となる。その間1935年には赤坂洋画研究所を開設。1945年倉敷に戻り、1961（昭和36）年9月食道癌のため逝去。版画との関係は岡田で段塚青一が主宰していた詩と版画の同人誌『版画と詩』の創刊号（1933.1）表紙の下絵を段塚に提供している。【文献】『20世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社 1997）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／「小林喜一郎」（倉敷市立美術館アーティストリスト インタネット検索）（加治）

小林清栄（こばやし・きよえ） 1894～1987

1894（明治27）年1月5日三重県南牟婁郡神川村（現・熊野市）に生まれる。本名茂。母方の実家は奈良県の山

林王西村家で、西村伊作とは従兄弟の関係。10歳年長の西村伊作から油彩画の手ほどきを受ける。1920年鹿子木孟郎に師事。1924年渡仏。1927年帰国し、藤島武二に師事する。1928年平井武雄・芦原曠と「昭和美術会」を創立。以降、昭和美術会展に出品を続ける。1934年からは新興独立美術展（後に「汎美展」と改称）にも出品する。1938年海軍従軍画家として中国に渡る。1940年新興独立第7回展に《乃木將軍旅順入城図》を出品。原画は遊就館に収蔵され、翌1941年には原画と多少図柄は異なるが、木版画〔《乃木將軍旅順入城図》〕（山岸主計彫、漆原栄次郎摺 元秩に『国威維揚』の題箋）を制作する。この年「清栄」と改名。1944年郷里へ疎開。1946年神川村長に就任。1948年三重県美術協会の発足に尽力。1954年熊野市長となる。1965年東京に転居し、1987（昭和62）年12月20日東京にて逝去した。三重県に疎開した西田武雄と親交があり、半峰（西田武雄）からの絵葉書をまとめた『思い出の西田半峰のハガキ絵』（黒田写真館 1987）の刊行がある。【文献】『小林清栄画集』（私家版 1974）／『版画堂』目録83（2009.6）／「小林清栄絵画展〔2010.1.13～17〕」イベント報告（東紀州ほっとネットくまどこ 2015.4.21）（樋口）

小林清親（こばやし・きよちか） 1847～1915

1847（弘化4）年8月1日江戸本所御蔵屋敷内に生まれる。9人兄弟の末子、幼名勝之助。雅号は方円舎、真生楼、真生など。幼少期から絵を描くことを好み、錦絵などにも親しんでいたが、特定の師匠は持たず独学。下岡蓮杖、河鍋曉齋、柴田是真、淡島椿岳らと親交があり、1874年頃には一時期、英人チャールズ・ワーグマンのもとで洋画を学ぶ。かねてから面識のあった両国の版元大黒屋松木平吉から29歳の1876年1月に大錦三枚続絵《東京江戸橋之真景》など3点を発行。同年8月から後に通称「光線画」とされる一連の横大判東京風景版画《東京小梅曳舟夜図》の発行を開始（1881年まで）。1877年に西南戦争関連錦絵や内国勸業博覧会出品の《イルミネーション》、特大判《猫と提灯》を版元松木から出品。1879年から版元福田熊治郎からも東京風景版画を出し始める。松木平吉からは横大判洋風静物版画刊行。1881年には両国大火題材の錦絵を出すも、光線画は終止符を打つ。『団団珍聞』に入社し、諷刺画を描く。翌大錦『清親ポンチ』シリーズ発行。1882年『驢尾団子』にも挿絵を、さらに朝鮮事変関連錦絵も描く。版元原胤昭から『新版三十二相』シリーズを刊行。1883年には福島事件被告肖像『天福六家撰』（版元：原胤昭）を刊行するも3枚で発禁。合作6作家による『教導立志基』シリーズに参加。1884年に『武蔵百景』シリーズ始まるも途中で止む。内国絵画共進会に肉筆出品し、以降は肉筆にも力をいれる。また新聞挿絵も描く。1889年以降、雑誌『美術園』『小国民』『いらつめ』『百花園』などの雑誌の木版・石版の口絵、挿絵で明治20年代一貫して活躍。1891年東京絵画学校教授となる。1894年日清戦争開戦に際し、三枚続絵三十数点を出す。これらの他に錦絵では歴史画、風俗変遷図、絵双六。石版では新聞附録、雑誌附録など多数。銅版作品もある。最後の浮世絵師であると共に明治にしか存在しない「明治の版画家」であった。晩年は肉筆画会を開催、頒布会などで活動した。1915（大正4）年11月28日逝去。法名は真生院泰岳清親居士。墓所は台東区元浅草の真言宗龍福院。門人には、井上安治・田口米作・土屋光逸・三田知空・吉田美芳・関西の野村芳国ら。【文献】吉田漱

「小林清親」『原色浮世絵大百科事典』2（大修館書店1982）（岩切）

小林清光（こばやし・きよみつ）1892～没年不詳

1892（明治25）年5月5日愛媛県越智郡に生まれる。1916年頃か、京都の関西美術院で洋画を学ぶ。木版画は独学だったと思われるが、その活動が最初に確認できるのは、1924年の『詩と版画』第7輯（1924.9）の「投稿画について」の文中である。選者の平塚運一は、「小林清光氏の「汐」は小さくまとまり過ぎておてカットじみた感が無いでもないが、刀の味も生きてゐるし、黒と白との調子も面白く、いゝ作である。すりも十分である。「あざみ」はさらひ残しに少し五月蠅い所もあるが、佳作である。唯、壺の上部左の方の白のは光であるか何であるか、一寸解りにくい」と評している。続いて、同年（1924）京都で開かれた「詩と版画社第1回展」（10.16～30丸太町・丸山医院）に出品。詩と版画社同人の恩地孝四郎・平塚運一らの作品とともに、『夜の人物』『秋晴の海』の2点が並び、『詩と版画』第8輯（1924.11）に『秋晴の海』の図版が掲載されている。その後、1927年の日本創作版画協会第7回展に木版画『鹽田風景』『鹽田附近』が初入選。出品時の住所は愛媛となっている。翌1928年の第8回展に『鹽田附近』、1929年の第9回展にも『子供』『風景』が入選した。1931年には新たな版画部を新設した国画会の第6回展に『鹽田附近』、翌1932年の第7回展に『伊予の港』が入選。平塚運一は、「小林清光氏は簡素な佳き風景を毎年見せて呉れる人であるが、この心持でもう少し力作を見せて貰ひ度いと思ふ」（『国画の版画』『美之國』第8巻第6号（1932.6））と評している。またその間、神戸の山口久吉の主宰する版画誌『HANGA』第12輯（1927.10）に『塩村付近』、第15輯（1930.3）に『風景』、中島重太郎の『きつつき』第3号（1931.6）に『喇叭』をそれぞれ発表しているが、その後の活動については不明である。【文献】『詩と版画』7（1924.9）／『詩と版画社第一回展覧会目録』（1924）／『美之國』8-6（1932.6）／『浅井忠と関西美術院展』図録（府中市美術館・京都市美術館 2006）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

小林源太郎（こばやし・げんたろう）1883～1951

1883（明治16）年東京に生まれる。3歳で母親を亡くし、父清次郎の母（祖母）の再婚相手である東京美術学校助教授の結城正明（義祖父）の家で養育される。幼少より義祖父結城正明に絵の手ほどきを受け、隣家に転居してきた狩野芳崖の弟子となる。1908年東京美術学校日本画科卒業。一時、友人の織田一磨に誘われて「パンの会」にも参加。東京帝国大学医科図工などを経て、1912年水島爾保布・小泉勝爾らと「行樹社」を結成する。1922年行樹社・青樹社・高原会など5つの急進的な日本画の小団体が結集した「第一作家同盟」の結成に参加。同団体解散後は日本プロレタリア芸術連盟の美術部に参加し、昭和初期の厳しい時代を経て、1927年頃より伊東深水の画塾（後の朗峯画塾）で顧問として日本美術史の講義を受け持つ。1935年頃より小林のもとに東京美術学校の学生も集うようになり、その中の池澤賢・石田一郎・神田禎之らと1938年「成層絵画研究集団」（のちに成層美術集団と改称）を結成。1938年日黒に「南郊外絵画研究所」を設立、

熊谷守一、柳瀬正夢などの出入りもあったという。その後の消息は確認できていない。1951（昭和26）年10月27日逝去。版画の制作は僅かで、行樹社時代に同人の小泉勝爾とともに風景版画会（本所区相生町5丁目）の依頼で、1916年頃に木版画『常盤橋』『深川平井橋』の2図を制作（作家名は「源太」限定100部）。【文献】『美術週報』104（1916.4）／『美術と文芸』6（柳屋書店1916.5）／『美之國』16-12（1940.12）／大正期日本画 その闇ときらめき（山口県立美術館 1993）／菊屋吉生「『成層絵画研究集団』の成立と変遷」『昭和期美術展覧会の研究 戦前篇』（東京文化財研究所 2009）（樋口）

小林古径（こばやし・こけい）1883～1957

1883（明治16）年2月11日新潟県中頸城郡高田（現・上越市）に生まれる。1899年上京して梶田半古の画塾に入り、「古径」と号す。半古塾では塾頭格で後輩の前田青邨、奥村土牛などを指導。当時、挿絵やコマ絵を「版画」と呼んでいたという。日本絵画協会・日本美術院連合会展などに出品して受賞を重ね、岡倉天心に認められる。1909年天心の勧めで前田家依頼の《加賀鳶図》を制作し、1910年ロンドンで開催の日英万国博覧会に出品する。同年安田靉彦、今村紫紅に誘われ紅児会に入会。1914年第1回再興院展に『異端』を出品して日本美術院同人となる。1920年延暦寺より伝教大師絵伝『十講始立』を依頼されて前田青邨と比叡山に赴く。1921年伝教大師御伝像を完成。1922年からおよそ1年間、青邨らと日本美術院留学生として渡欧。大英博物館蔵の伝禮愷之筆《女史箴図卷》を模写して影響を受ける。安田靉彦・前田青邨と「再興日本美術院の三羽鳥」と言われ、院展などで活躍した。1937年帝国芸術会員。1944年東京美術学校教授、帝室技芸員。1950年文化勲章受章。代表作に『竹取物語』（1917）『清姫』（1930）の二絵巻物や『髪』（1931）など。1957（昭和32）年4月3日逝去。版画の制作は、前田青邨、安田靉彦らと合作で木版画集『伝教大師御絵伝』（比叡山延暦寺 1929）に『十講始立』1図を制作。また、没後に刊行された『小林古径 素描木版画集』（芸仲堂 1976）がある。【文献】『小林古径画集』（朝日新聞社 1981）／『山田書店新収目録』56（2002）／『山田書店新収美術目録』77（2007）（樋口）

小林繁三（こばやし・しげぞう）

1938（昭和13）年4月の造型版画協会第2回展に『茶器静物』、翌1939年5月の第3回展に『鶴見風景』『卓上静物』を出品。出品時は横浜に住む。【文献】『造型版画協会第二回展目録』（1938）／『造型版画協会第三回展目録』（1939）（三木）

小林鍾吉（こばやし・しょうきち）1877～1946

1877（明治10）年3月14日東京に生まれる。東京専門学校（現早稲田大学）英文科卒業。その後、白馬会洋画研究所に学ぶ。1899年東京美術学校西洋画科選科に入学し、1903年同校卒業。白馬会には第7回展（1902）より第13回展（1910）まで出品。1902年より長原孝太郎と本郷菊坂町の白馬会第二研究所（菊坂研究所）で指導にあたる。1903年『水彩画一斑』（中西屋書店）を出版。1904年白馬会会員となる。1911年の白馬会解散後は、中澤弘光・山本森之助・三宅克己らと1912年に「光風会」を創設し、以降は光風会展を中心に、第8回（1914）、第10回（1916）の文展などにも作品を発表。また、小

説なども著す文章家でもあった小林は、紀行文も能くし、『画行脚』（彩雲閣 1908）『紀行漫画』（一書堂書店・国文館書店 1911）『日本名勝写生紀行』（中西屋書店 1906～1913）などに紀行文と旅先の地方色豊かな木版挿画を発表。田山花袋『箱根紀行』（博文館 1908）などの明治後期の小説や巖谷小波・文による絵本シリーズ『日本一ノ画噺』（中西屋書店 1911～1915 全35冊）に杉浦非水、岡野栄らとともに挿絵を描くなど、児童書や絵本なども手掛けた。1946（昭和21）年5月11日逝去。【文献】『結成100年記念 白馬会 明治洋画の新風』展図録（ブリジストン美術館・京都国立近代美術館ほか 1996～1997）／『日本の版画 I 1900～1910』（千葉市美術館 1997）（樋口）

小林二郎（こばやし・じろう） 1911～1993

1911（明治44）年栃木県日光町（現・日光市）中鉢石に生まれる。1924年に川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に入学し、長谷川勝三郎ら同校生徒による版画誌『刀』の創刊に参加する。その第1輯（1928）に《チウリップ》《流星》《無題》、第2輯（1928）に《花》、第3輯（1928）に《壺》、第4輯（1929）に《静物》、第5輯（1929）に木版画の表紙絵と《風景》を発表。1929年同校を卒業。明治大学商学部に入學。大学ではスケート部の部長を務めた。1937年に同校を卒業。高島屋飯田株式会社（後の丸紅）に入社、上海勤務となる。戦後は自ら貿易会社を設立した後、家業の小林商会を引き継ぐ。中学卒業後は版画制作から遠ざかる。1993（平成5）年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

小林晋也（こばやし・しんや）

1929（昭和4）年の京都創作版画会第1回展（2.1～5 京都大丸）に木版画《家》《少女》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』（京都創作版画会 1929）（三木）

小林創児（こばやし・そうじ）

1929（昭和4）年に静岡で開かれた「童土社同人第1回創作版画展」（10.5～7 田中屋襦衣店）に《ゆたかなる食卓》《あざみ》《朝》《芽ぐむ頃》《午睡》《秋をかたのる》の6点を出品。【文献】『童土社同人第一回創作版画展覧会出品目録』（1929）（三木）

小林武雄（こばやし・たけを）

長崎の郷土を愛する詩人や版画家の集まりである版画長崎の会が発行した版画・文芸同人誌『詩と版画』第1輯（1934.2）に《天草風景 その1》《天草風景 その2》を発表する。その後、『詩と版画』は改題して『版画長崎』となり、巻号を継承した第2輯（1934.4）には《花》を発表。1934年と1935年の夏には、平塚運一を講師として同会主催の版画講習会が開かれたことにより、長崎の新版画運動は盛り上がっていく。小林はこの講習会に先立つ1934年4月16日に長崎から満州へ渡る（『版画長崎』3 1934.5）。その後の小林について『版画長崎』第5輯（1935.8）の「編集余言」では「小林武雄氏 渡満中の兄姉崎、目下300噸の超弩級木船建設中にて多忙を極め制作の余暇なきは遺憾」と書かれている。そんな多忙な中でも、1935年8月に開かれた第2回版画講習会（9日）には参加したようで、講習会の記念写真には小林

の姿が写っている（阿野露団「磨屋小で講習会」）。また、長野県須坂で信濃創作版画研究会が発行した版画誌『樫』の第2輯（1934）に《賀状》、第3輯（1934.7）に《困炉》、第5輯（1935.4）に《賀状》、第7輯（1935.8）に《蔵書票》（「たけを」の蔵書票）、第13輯（1937.6）に《賀状》など、同人であった『版画長崎』よりも多くの作品を寄稿していた。1935年8月当時の連絡先は、長崎市国分町コタケ造船所（『版画長崎』5）となっているが、戦後復刊した『版画長崎』第6号（1953.7）、そして終刊号となる第7号（1963.1）には小林の消息は掲載されていない。【文献】阿野露団「磨屋小で講習会」『長崎を描いた画家たち 上』（形文社 1988）／『創作版画誌の系譜』（加治）

小林長太（こばやし・ちやうた） 生年不詳～1959

長崎県に生まれる。1911年東京美術学校図画師範科に入学し、1914年同校を卒業。長崎県佐世保高等女学校を経て、1919年頃から長崎県師範学校美術教諭として勤務。木版画は、1934年夏（7月か）に「版画長崎の会」（田川憲一ら）が主催する平塚運一の版画講習会（磨屋小学校か）で習得したものと推定される。その後、版画誌『版画長崎』の同人になり、第4輯（1934.11）に木版画《鮎》《雨後》、第5輯（1935.8）に《唐人干》《自画像》を発表。1935年8月の第2回平塚運一版画講習会（磨屋小学校）にも参加した。また同じ頃、銅版画も試みていたようで、1934年9月の『エッチング』第23号の「研究所通信」には「長崎師範学校の小林長太教諭から御手紙。同氏は早くも舶来プレッスを購入されて、研究されて居られるそうだが、今度同校附属の六年生に実習さしたいがとの相談をうけた」と紹介されている。1936年8月には西田武雄と「エッチング講習会」（16日 長崎県師範学校）を開催。『エッチング』第48号（1936.10）にはその頃の作品《〔花の静物〕》の図版が掲載された。また、1937年7月の恩地孝四郎・西田武雄の「版画講習会」（21～25日 長崎市勝山小学校）の開催にも尽力した。その後、1941年の第2回日本エッチング展に《花》を出品。1943年には日本版画奉公会会員になっている。なお、『みづゑ』131号（1916.1）には、1915年に開かれた「佐世保洋画展覧会」（11.11～13 比良町・浸礼教会堂）の展評が紹介されているが、油彩画《燈火の童》《浴後》《海辺少女の図》、水彩画《港の雨》など計12点を出品している「小林長太郎」は「小林長太」の誤記かとも思われるので、初期の活動例として紹介しておく。【文献】『東京美術学校一覽 従大正六年至大正七年』（東京美術学校 1918）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二卷』（ぎょうせい 1992）／阿野露団『長崎を描いた画家たち（上）』（形文社 1988）／『エッチング』23・47・48・56・58・59・101・126／『創作版画誌の系譜』（三木）

小林徳三郎（こばやし・とくさぶろう）

1884（明治17）年1月8日広島県福山町（現福山市）に生まれる。幼名は藤井嘉太郎だが、まもなくして商家の当主である叔父・六代目小林徳三郎の養子となり、七代目徳三郎を襲名する。1896年東京の私立正則中学校に入学。同級に福原信三らがいいた。1909年東京美術学校西洋画科を卒業。1912年ヒュウザン会の創立に参加し、第1回展に油彩画と版画《軽業其一》《軽業其二》《軽業其三》（以上木版画）《習作》（エッチング）を出品した。翌1913年の第2回展にパステル画を出品。またこの年、劇

団「芸術座」の舞台装飾の仕事に参加し、「モンナ・ヴァンナ」の装飾を担当。さらに芸文同人雑誌『奇蹟』の準同人となり、1巻4号と2巻1号の表紙画を版画で制作した。版画の制作はほかに《港のみえる風景》があるが、すべて初期の時代に限られる。1918年から1920年まで院展に油彩画を出品。1922年野島康三郎で個人展覧会を開催した。また、同年創立の春陽会の展覧会に第1回展(1923)より出品し、第13・14回展を除いて1949年の第26回展まで油彩画の出品を続け、主たる発表活動の場とした。1927年に新宿紀伊国屋で、翌1928年に資生堂ギャラリーで個展を開催。1933年肺結核が発覚し、福原信三の計らいで千葉県館山での療養・静養生活に入る。1936年快癒して東京に戻り、翌年の春陽会展に館山で制作した作品をまとめて発表した。1943年兜屋画廊で個展を開催。春陽会展会期中の1949(昭和24)年4月18日東京で逝去。【文献】『小林徳三郎研究図録』(ふくやま美術館 2014) (滝沢)

小林 亮 (こばやし・とおる)

長野県下水内郡の小学校教師の集りであった下水内郡手工研究会が発行した『葵』第1号(1934.9)に《白バラ》、第2号(1935)に《池辺の鶴》、第3号(1936.7)に《ねづみ》、第4号(1937.7)に《洋館》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小林俊夫 (こばやし・としお)

長野県下水内郡の教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第2号賀状号(1935)に《子供》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小林寅三 (こばやし・とらぞう)

1929年の京都創作版画会第1回展(2.1~5 京都大丸)に木版画《四条大橋》《祇園石段下》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』(京都創作版画会 1929) (三木)

小林秀恒 (こばやし・ひでつね) 1908~1942

1908(明治41)年4月17日下谷区二長町(現在の台東区台東)に生まれる。父米二郎、母ひさの六男(六男六女の内の)。本名秀吉(ひできち)。16歳で池上秀畝(伝神洞画塾)に入門。後に山川秀峰にも師事。志村立美とは兄弟弟子。はじめは日本画家をめざしたが、岩田専太郎に抜擢されて挿絵画家の道を進む。清水望陽の筆名で主に岩田専太郎の絵に似た鬚物を描いた頃もあった。菊池寛の新聞小説「貞操問答」(『大阪毎日』『東京日日新聞』)で好評を得て華々しくデビュー。江戸川乱歩「怪人二十面相」(黒のシルクハット・マスク・マント姿を確立)、吉屋信子「妻の場合」や「良人の貞操」、野村胡堂「銭形平次捕物控」で知られる。新聞の他に、雑誌『サンデー毎日』『アサヒグラフ』『週刊朝日』などでも活躍し、岩田専太郎、志村立美と「挿絵界三羽鳥」と称される時代があったが、実質活動期8年程の短命で惜しまれた。1935年の『名作挿画全集』予約パンフレット広告は、「菊池寛氏の推薦で世に出るや、奔馬空を行く如く、今や最も油の乗ったところ、寛氏「結婚の条件」小島政二郎氏「恋の海峡」吉屋信子氏「双鏡」と評判の小説の挿画は一人で占めてあるかのやう、現代ものにはなくてならぬ人でせう」とする。門下に小松崎茂がいる。1942(昭和17)年9月10日逝去。【文献】『小林秀恒展』図録(弥生美術館 2009) (岩切)

小林松夫 (こばやし・まつお) 1909~1981

1909(明治42)年栃木県芳賀郡茂木村(現・茂木町)に生まれる。本名は松雄。1923年頃、茂木尋常高等小学校高等科卒業。1924年頃に栃木県師範学校入学し、1927年同校を卒業。栃木県芳賀郡の市塙尋常小学校に勤務し、1930年には宇都宮市内の築瀬尋常小学校に赴任。同僚の池田信吾に版画の手ほどきを受け、制作を始める。川上澄生や池田らが発行していた版画誌『村の版画』に参加し、第12号(1932.1)に《賀春》《子供》《野菜》《川辺 3点》《校舎》、3月号〔通巻13号〕(1932.3)に《風景 1》《風景 2》《玩具》《雑草》、第4号〔通巻14号〕(1932)に《天主教会》《まりつき》《玩具》《子供》を出品。第7号〔通巻17号〕(1933.12)では編集にも加わり、以後最終第19号(1934)まで毎月複数の作品を発表し続ける。川上澄生との関係からか東京の料治熊太とも親交を深くしており、料治主宰の『白と黒 第一次』第26号(1932.7)に《帽子》をはじめ、第27・29・30・32・40・42号(1932~1933)に作品を発表。第29号(1932.11)には《橋上より》のほかに《蟹》と題して裏表紙絵も提供しており、第30号自刻自画像号(1932.12)には眼鏡をかけ版画制作の道具に囲まれた自画像が掲載されている。また料治発行のもう1つの版画誌『版芸術』第6・9・19号(1932~1933)にも作品を発表。1939年には病氣療養のため退職したが、1941年には東京の小学校教員として復職し、1968年に定年退職を迎える。武井武雄・棟方志功・池田満寿夫ら全国の版画家たちとも交流を持ち、作品は少なくなったが、スケッチと版画制作を晩年まで続け、戦後は青森県版画会が発行した『青森版画』第35号(1963.11)に《ささやき》、第38号(1964.11)に《鷹》、第40号(1965.6)に《自画像》など第72号(1975.1)まで作品を発表。1964年には東京都葛飾区から練馬区大泉学園町に転居。1981(昭和56)年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小林萬吾 (こばやし・まんご) 1870~1947

1870(明治3)年5月2日(10日)香川県三豊郡詫間町(現在の三豊市)に生まれる。中学の国語教師堀越喜三郎に師事。また、上京して安藤伸太郎を介して1887年から原田直次郎に師事。1889年第三回内国勸業博覧会の《芝東照宮拜殿》で褒状を受ける。1895年から黒田清輝の指導を受ける。1896年東京美術学校西洋画科選科に学び、白馬会に参加。1898年卒業。1903年内国勸業博覧会で《門づけ》が三等賞となる。1907年第1回文展の《物思ひ》で三等入選。1909年第3回文展の《渡舟》でも三等賞となる。1913年から文部省派遣で欧州に留学し、1914年帰国。1916年東京高等師範学校教授兼任とともに光風会会員となる。1918年から1944年まで東京美術学校教授。1940年帝国芸術院会員。1947(昭和22)年12月6日鎌倉市の自宅で逝去。歌誌『こころの花』では1899年から1944年の45年にわたって表紙絵、口絵、附録絵葉書、カットなどを担当した(このことは「画家小林萬吾と歌誌『心の華』』『一寸』28に詳述)。ここの版画(木版・石版)をはじめ、『光風』(1906)第二年第四号(「傀儡師」(石版多色)、『早稲田中学講義』(1910)口絵版画、『新版画集(序輯)』(石川寅治との軼入木版画集・大正未か)での《舞妓》(木版多色摺)、『山田書店古書目録11 1988.7)などの版画作例があるが、未だ一部に過ぎない。【文献】岩切信一郎「画家小林萬吾と歌誌『心

の華』『一寸』28 (学藝書院 2006.10) / 『日本美術年鑑』昭和 22 - 26 年版 (美術研究所 1952) (岩切)

小林道彦 (こばやし・みちひこ)

西田武雄が発行していた日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第 58 号 (1937.8) にエッチング作品が掲載されている。タイトルは付されていないものの「長崎市 東京美術学校生 小林道彦」と紹介されている。また同号には 1937 年 7 月に開催された長崎市勝山小学校での長崎市版画講習会 (21 ~ 25 講師: 恩地孝四郎・西田武雄) の記事もあり、そこに掲載されている参加者名簿によると、小林の所属は長崎県師範学校となっている。その講習会について西田は「エッチング講習会旅行記」として旅行日記を掲載しているが、そこには駒井哲郎や笠木実と小林らが海水浴に行ったことなども記されている。【文献】西田武雄「エッチング講習旅行記(1)(2)」(『エッチング』58・59 1937.8・9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

小林守男 (こばやし・もりお)

福島県須賀川第一小学校高等科 2 年の 1937 年 4 月、同校においてエッチング講習会 (24 ~ 25 日 講師: 西田武雄) が開催され、その講習会に参加。制作した作品が西田の日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第 55 号 (1937.5) に掲載される。【文献】『エッチング』55 / 『創作版画誌の系譜』(加治)

小針孝一 (こばり・こういち)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校 (現・宇都宮高等学校) で同校生徒が発行した版画誌『刀』(1928 ~ 1932) に参加していた佐伯留守夫・岩田信義・安西七郎が中心となり制作した版画集『我等の板画』(刊行年不明) に《ポプラ》を発表。【文献】『我等の板画』(加治)

湖北楼人 (こほく・ろうじん)

川上澄生を中心に栃木県宇都宮市で小・中学校の教師仲間が発行した版画誌『村の版画』(1925 ~ 1934) の最終号となった第 19 号 (1934.2) に《朝鮮風景》を発表。【文献】『版画をつづる夢』展図録 (宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

小堀鞆音 (こぼり・ともと) 1864 ~ 1931

1864 (元治元) 年 2 月 19 日 (西暦 3 月 26 日) 下野国 (栃木県) 安蘇郡旗川村小中村に生まれる。旧姓須藤、本名桂三郎。1883 年に小堀家の養子となり相続。号は琢舟、雨舟、弦廼舎。1884 年第二回勧業博覧会に日本画《人物》《動物》で入選。上京を機に川崎千虎のもとに入門し、古土佐を学ぶ。1889 年青年絵画共進会で一等褒状を受けた。この時に「鞆音」の雅号を用いた。翌年の第 3 回内国勧業博覧会に《大阪後之役図》で妙技三等賞受賞。東京美術学校助教授の 1898 年に岡倉覚三と共に職を辞して日本美術院の創立正員となる。1902 年に水野年方らと「歴史風俗画会」を結成し、有職故実の研究を深め、古武器収集を始める。1908 年復職し東京美術学校教授となる。故実に通じ有職に明るく古土佐での第一人者をもって文展では第 1 回から日本画部審査員。第 3 回展 (1909) の《旅路》、第 4 回展 (1910) の《雄図》などが知られる。1912 年に「弦廼舎画塾 革丙会」を発足。帝国美術院会員、古社寺保存会委員。門下は、安田朝彦・磯田長秋・尾竹竹坡・尾竹国観・小山栄達など多い。1931 (昭和 6) 年 10 月

1 日逝去。有職故実研究の成果を武者絵、歴史画などに示す。『文芸倶楽部』での木版口絵、青木嵩山堂などからの単行本口絵などにもその成果がみられる。他に 1920 年『義士大観』中の《殿中の争闘》、1931 年『日蓮聖人御伝木版画』(650 年遠忌報恩記念出版) 全 33 図中の《見延隠棲》、同じころに『伝教大師御絵伝』8 点木版の 1 点を担当。【文献】『20 世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

駒井哲郎 (こまい・てつろう) 1920 ~ 1976

1920 (大正 9) 年 6 月 14 日東京市日本橋区魚河岸 (現中央区日本橋室町) に生まれる。六男。生家は水間屋を営んでいた。1927 年慶応義塾幼稚舎に入学、1933 年普通部に進学し図画教師の仙波均平から指導をうけた。1934 年紳士録に名前のある父に送られてきた『エッチング』第 26 号を見て銅版画を知る。1935 年西田武雄が主宰する日本エッチング研究所に通いはじめ、デッサンやエッチング、ドライポイントを習い始める。また西田経営の画廊「室内社画堂」でメリヨン、ホイッスラー、ルドン、レンブラント、ムンク、長谷川潔らのオリジナル銅版画に接した。研究所では関野準一郎や笠木実らとも知り合い、線で描くエッチングの普及を図る西田のもとで制作し、彼らとともに戦前の日本銅版画史に足跡を刻んだ。この年 (1935) の『エッチング』36 号に《上高地ホテル》が掲載され、はじめて作品が公表された。1936 年 1 月発行の同誌 39 号に《足場》が掲載され、5 月には研究所製のプレス機を購入して制作に励んだ。1938 年東京美術学校油画科に入学、予科で田辺至に指導を受け、本科に進んでからは小林萬吾教室で学んだ。1941 年日本エッチング作家協会第 2 回展に《港》を出品、またこの年の新文展に《川岸》が入選した。1942 年東京外国語学校フランス語専修科に入学 (翌年終了)、一方東京美術学校は繰り上げ卒業した。1943 年設計事務所に就職して平田重雄の指導をうける。1944 年応召、陸軍歩兵二等兵として入隊。1945 年脚気のため一旦除隊したが、再び応召、終戦をむかえて復員した。戦前の作品の多くは空襲で失われた。1947 年恩地孝四郎らの版画研究会「一木会」の同人となり、翌 1948 年からは日本版画協会への出品を開始した。1950 年春陽会展に《孤独な鳥》を出品し春陽会賞を受賞、岡鹿之助がこの作品を激賞する。以後、日本版画協会と春陽会、個展発表をベースに活動。1951 年の第 1 回サンパウロ・ビエンナーレ、翌 1952 年のルガノ国際版画ビエンナーレで受賞し、版画家としての評価を固め、1976 (昭和 51) 年 11 月 20 日に病で逝去するまで、日本の版画界に大きな影響を与えつつ創作活動を展開させた。東京藝術大学と多摩美術大学などで教え、多くの後進を育てた。【文献】『駒井哲郎 1920-1976 図録』(町田市立国際版画美術館ほか 2011) (滝沢)

小牧源太郎 (こまき・げんたろう) 1906 ~ 1989

1906 (明治 39) 年 7 月 16 日京都府中郡口大野村 (現・大宮町) に生まれる。6 歳の頃、大病による特異な幻覚体験から非合理や観念世界への関心を強くする。1925 年京都府立宮津中学校卒業後、龍谷大学、大谷大学に入学するも、いずれも 1 年と続かず。1930 年立命館大学経済学部 (夜間部) に入学し、1933 年 28 歳で同校を卒業する。同年 1 月に京都で開催の「巴里新興美術展覧会」を観て衝撃を受け、ダダやシュールレアリズムを知って絵画の道を志す。1935 年独立美術京都研究所に入所。同

所で実技指導を行っていた須田国太郎に強く影響を受け、研究所先輩の北脇昇と出会う。1937年第7回独立展に油彩画《夜》が初入選。《民族系譜学》《民族病理学（祈り）》などで注目される。1938年創紀美術協会結成、1939年美術文化協会結成などに北脇と共に参加し、戦前の前衛絵画運動に身を投じた。戦後は、1954年美術文化協会の内紛を機に同会を退会し、1962年以降は晩年まで国画会展に出品を続ける。1988年第1回京都美術文化賞受賞。1989（平成元）年10月12日京都で逝去した。

1936年8月京都で開催の西田武雄を講師に招いたエッチング講習会に須田国太郎は北脇昇、安田謙ら独立系の作家らと参加する。中井平三郎が中心となって京都エッチング協会が設立され、1938年1月からは中井宅で毎月研究会が開かれ協会報なども発行された（『研究所通信』『エッチング』64 938.2 未見）。この時期須田は北脇と同様に銅版画の制作に関心を示し、中井宅の研究会に何度も参加して、1936年から1939年にかけて少なくとも5点の銅版画を制作する（北脇は9点）。戦前の小牧の版画は未見だが、小牧も1937年夏の京都市エッチング講習会に北脇と共に参加していたことから、須田あるいは北脇の影響で、何らかの制作があったのではないかと推測する。（『エッチング講習会員名簿』『エッチング』58 1939.8）。なお、戦後の制作には、シルクスクリーンによる版画集『いろは』No.1～No.4（ギャラリー芦屋 1976）や『カリファ幻想』No.1～No.3（ギャラリー芦屋 1980）などがある。【文献】『エッチング』47・58・64／『小牧源太郎－その軌跡と展望－展』図録（いわき近代美術館 1985）／『小牧源太郎遺作展』図録（京都国立近代美術館 1995）／『第7回 須田国太郎展』図録（白銅鞮画廊 1997）（樋口）

小松栄太郎（こまつ・えいたろう）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）在学中に、同校生徒が発行した版画誌『刀』（1928～1932）に参加。第11輯（1931）に《長閑》、第12輯（1931）に《風車》、第13輯（1932）に《静物》を発表する。1934年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

小松繁太郎（こまつ・しげたろう）

明治の石版印刷業界誌『虹』第1巻6号（1908.7）に石版画《石橋》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

小松展子（こまつ・のぶこ）

1939（昭和14）年6月に開催された朝井清の主宰する『呉版画倶楽部』の第2回展に出品。作品名は不明。【文献】『日本版画協会会報』31（1939.9）（三木）

小松秀雄（こまつ・ひでお）

長野県諏訪郡上諏訪に生まれる。長野県師範学校一部2年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第3号（1941）に《連峰》を発表。1944年同校を卒業。1950年当時、諏訪郡下諏訪中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

小松 均（こまつ・ひとし） 1902～1989

1902（明治35）年1月19日山形県豊田郡豊田村（現・村山市）に生まれる。本名勻（ひとし）。父は曹洞宗の住

職であったが、幼くして父を亡くし、叔父に養育される。上京して苦学しながら川端画学校で日本画を学ぶ。1924年第4回国画創作協会展に出品の《晩秋の野に死骸を送る村人たち》が縁で土田麦僊の知遇を得、京都に転居して麦僊の山南塾に入塾する。1926年第5回国画創作協会展で《夕月》《秋林》が国画賞を受賞し、会友となる。1927年大原に定住し、山野を耕しながら画業に専念する。1928年国画創作協会日本画部解散後は、福田豊四郎らと「新樹社」設立に参加。1929年第10回帝展に初入選。1930年院展に初入選で特選を受賞。1931年に吹田草牧らと新樹社を脱退。1934年第21回院展を最後に一時公募展離れ、1942年以降は主に院展に出品する。1946年第31回院展で《牡丹》が日本美術院賞を受賞し、同人に推挙される。大原の風景や故郷の最上川の風景を描き、1975年「最上川シリーズ」で芸術選奨受賞。その後は富士の連作などを描く。1986年文化功労賞受賞。「大原の画仙人」と称された。1989（平成元）年8月23日京都で逝去。版画の記録としては、1930年第2回新樹社展に《人形》（版種は不明）の出品歴を持つ。戦後は、1962年頃より《雪景色》《大原女》などの木版画を二十余点制作。その後、京都銅版画協会を主宰する古野由男に銅版画を学んで、1970年代に《花菖蒲》《舞妓》《裸婦》《鯉》《蓮の花》など骨太な銅版画を制作した。【文献】『版画芸術』18（阿部出版 1977）／『日本美術年鑑』1990年版／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（樋口）

小松行高（こまつ・ゆきたか）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）5年に在学中、かつて同校生徒によって刊行されていた版画誌『刀』（1928～1932）の再刊を思い立ち、仲間たちと版画誌『刀 再版』（1940～1941）を創刊する。その第1号（1940）に《窓》、第2号（1940.10）に《杉》、第3号（1941）に《冬の踏切り》を発表。第4号（1941）には卒業生として《ニコライ堂》を寄稿している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

小峰大羽（こみね・たいう） 1873～1945

1873（明治6）年2月15日東京神田に生まれる。本名は邦寿。大羽楼大羽と号す。1891年府立築地中学を卒業。文学を尾崎紅葉、絵画を狩野洞谷に学ぶ。富岡永洗門下として、『風俗画報』を始め、新聞・雑誌の挿絵や江見水蔭『地中の秘密』、小栗風葉『強き恋』、徳田秋声本の木版口絵や装丁などを手掛ける。俳人としても知られ、1910年俳諧雑誌『高潮』を発行・主宰する。著書に『大羽楼句集』（大羽先生画賛展覧会事務所 1939）、『季題解釈』（大日本俳諧講習会 刊年不明）、『東京語辞典』（新潮社 1917）などがある。1913年飛騨に魅せられ岐阜県高山に移住。「飛騨史談」創立に参加し、『飛騨史談』の編集を担当。地元俳句結社の指導なども行う。1932年名古屋市へ転居。その後は東京に戻って、1945（昭和20）年5月24日逝去した。高山市近代文学館において2009年2月21・22日「小峯大羽展」が開催された。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）／『小峯大羽年譜』（高山市近代文学館 2009）（樋口）

小宮山孝海（こみやま・たかみ）

長野県北安曇野郡の小学校教師を中心とした創作版画的な団体「黄樹社」（顧問：武田新太郎）の会員。同社の版

画作品集『黄樹』創刊号(1937.3)には版画を貼る小宮山の台紙はあるものの作品は貼付されていない。第2号(1938.5)の会員名簿にも氏名が掲載されていることから、何らかの事情で不出品になったと思われる。1938年5月当時、北安曇郡松川小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小宮山敏郎(こみやま・としろう)

長野県須坂で信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第6輯(1935.4)と第9輯(1936.4)に賀状を発表。第6輯の当時は上高井郡須坂小学校高等科1年、第9輯では須坂中学校(現・長野県須坂高等学校)1年の作として発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

小村雪岱(こむら・せつたい) 1887～1940

1887(明治20)年3月24日埼玉県川越町に生まれる。本名泰助。1901年上京、画家を志して1903年荒木寛畝に入門。翌年東京美術学校日本画科選科に進み、下村観山に就く。卒業後は國華社で古画の模写に携わる。泉鏡花との親交から装幀の道が拓け、1914年の『日本橋』で鮮烈なデビュー。以後その多くに木版の美質を活かした装本を手がけ、生涯に300冊に及ぶ作を残す。1918年資生堂意匠部入社。1922年挿絵に着手、やがて鈴木春信やピアズレー、仏画の造形を渾然とさせた独自の作風を確立して一時代を築く。邦枝完二「おせん」や「お伝地獄」、子母沢寛「突っかけ侍」などをその代表作とし、仕上げた挿絵は200作を超えた。また舞台や映画の装置にも才を発揮している。1940(昭和15)年10月17日東京市麹町区平河町で逝去。

雪岱の版画として世に出たものは多いが、生前に完成した一枚摺は1935年頃に邦枝完二が私家版で制作した《お伝地獄》4点および1940年に高見沢が出版した「昭和錦絵美人十粧」の一点《燈影》のみと推測される(『柳屋』37号(1929.5)に主情派美術協会刊行「主情派現代風俗版画集」の一点として《下町娘倉の中更衣の圖》を頒布予定とあるが未確認。また『Japan Today & Tomorrow』1935-36年号の挿画《おみじ》を生前の版画に含むこともある。さらに、雪岱自身がどこまで関与したかは定かではないが、1939年から翌年にかけて、わかもと製菓から雪岱の図柄による木版摺の団扇15種が売り出されている)。《燈影》の制作については、当時高見沢木版社編集部に席のあった小野忠重が、完成した原画をもとにするのではなく、線描を主版とし校合摺に色ざしをする昔ながらのスタイルであったとの証言を残している。没後の1941～43年頃、戦時下に作品が失われることを恐れ、高見沢とアダチが中心となって雪岱の肉筆画を木版に起こしている。弟子の山本武夫が監修を手がけたとされ、実際多くの作品が伝わっているが、戦中に計画が途絶したこともあり制作年など詳細は明らかではない。戦後に高見沢木版社が刊行した雑誌『浮世絵草紙』の1946年の記事では、中絶した「小村雪岱版画集」12枚を再刊するとあり、《春雨》《おせん其一》といったタイトルがあげられている。また下記平田雅樹文献に引用されている1950年の「小村雪岱版画刊行趣意書」によれば、アダチ版は1944～45年に《青柳》《寒山拾得》《雪の朝》《河岸》《雪鬼》《筑波》の6点が完成し(300部限定、彫師は大倉半兵衛)、戦後全12点を予定して再刊されたという(一

部未刊)。版画がいかに制作されたかの調査は今後の課題といえようが、雪岱が自ら手がけた版の絵としては、むしろ装本を取りあげるべきかもしれない。【文献】小野忠重「装本家小村雪岱」『小村雪岱』(形象社1978)／星川清司『小村雪岱』(平凡社1996)／『おんなえ 近代美人版画全集』(阿部出版2000)／平田雅樹「雪岱の装丁本 第一回 鏡花本と千章館・平和出版社本」『人魚通信』1(人魚書房2003.11)／『小村雪岱とその時代 粋でモダンで繊細で』(埼玉県立近代美術館2009)／「特集 小村雪岱を知っていますか?」『藝術新潮』722(2010.1)／埼玉県立近代美術館監修+大越久子著『小村雪岱 物語る意匠』(東京美術2014)(西山)

小室金三(こむろ・きんぞう)

1928年10月のアトリエ社主催第15回誌上展覧会(山本鼎選)で木版画《自画像》が佳作入選する。1928年当時、埼玉県在住。【文献】『アトリエ』5-10(1928.10)(樋口)

小室翠雲(こむろ・すいうん) 1874～1945

1874(明治7)年8月31日当時栃木県であった館林町(現在の群馬県館林市)に生まれる。本名貞次郎。父の影響で幼少より絵を好み、1889年南画家田崎草雲に師事。草雲の父の雅号「翠雲」を授けられる。1898年草雲没後は上京するも特定の師にはつかずに中国絵画を研究し、日本画会や日本美術協会に出品する。1907年文展開設にあたり、審査員の人選を不満として高島北海らと「正派同士の会」を結成するが、翌1899年第2回展からは文展に出品を続け、連続で5回受賞して声望を高める。文展・帝展の審査員をしばしば務め、1921年関西の若手南画家らが結成した「日本南画院」設立に請われて参加する。1932年「南画鑑賞会」を設立し、『南画鑑賞』誌や『南画講習会録』の発行など南画の復権と振興に貢献、南画壇の重鎮として活躍した。1935年日本南画院を解散。その後は「南画連盟」顧問などを経て、1941年中国、台湾、朝鮮半島の画家と連携して「大東南宗画院」を設立し委員長に就任する。1944年帝室技芸員。戦争末期の1945(昭和20)年3月30日逝去した。版画の制作は、赤穂浪士の事跡を纏めた木版画集『義士大観』(義士会出版部1921)に《赤穂城と大石邸》1図の制作と、1944年に開催された「戦艦献納帝國芸術院会員美術展覧会」出品の中から5点を選んで木版画に複製する事業が版画奉公会によって試みられ、鏑木清方、上村松園、川合玉堂、結城素明とともに翠雲の《花らんまん》が選ばれて版画化されている(彫は川面義雄、摺は小川房吉。奥山儀八郎著『日本の木版画 その伝統の流れ』(慶文社1977)では《山鳩》の作品名)。【文献】奥山儀八郎『日本の木版画 その伝統の流れ』(慶文社1977)／西山純子「日本の版画・1941-1950・「日本の版画」とは何か」『日本の版画 1941-1950』展図録(千葉市美術館2008)／『山田書店新収美術目録』81(2008春)／『小室翠雲(1874-1945)展』図録(群馬県立館林美術館2010)(樋口)

古茂田次男(こもだ・つぐお)

長野県須坂で信濃創作版画研究会が発行した版画誌『櫟』第12輯賀状号(1937)に賀状を発表。【文献】『須坂版画美術館 収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」』『臥竜山風景版画集』(須坂版画美術館1999)／『創作版画誌の系譜』(加治)

古茂田守介(こもだ・もりすけ) 1918～1960

1918(大正7)年愛媛県道後村大字祝谷に生まれる。8歳上の兄に洋画家の公雄(1910~1939)がいる。1935年北予中学を卒業。1937年兄を頼って上京。中央大学法科(夜間部)に入学。公雄の紹介で猪熊弦一郎、続いて脇田和に師事。1939年中央大学法科を中退し、大蔵省に勤める。1940年造型版画協会第4回展に《裸婦》を出品し、造型版画協会賞を受賞。また、同年の第5回新制作派協会展に油彩画《裸婦》が初入選。翌1941年には造型版画協会第5回展に《ベレーの女》《サーカスの女》《立てる裸婦》《座れる裸婦》の4点、第6回新制作派協会展に油彩画《裸婦》《踊り子》が入選した。また、この年から大蔵省財務官書記生として、北京大使館に勤務したが、1943年体調を崩し帰国。戦後は、1946年に大蔵省を退職し、画業に専念。再び新制作派展に出品するようになり、同年の第10回展で新制作派協会作家賞を受賞。以後、1959年の第23回展まで、独自の具象絵画を毎回出品し、1950年には会員に推挙されている。美術団体連合展(1947~1951)、日本アンデパンダン展(読売新聞主催 1949~1951・1956)、1949年から1953年の秀作美術展(1949~1953)、現代日本美術展(1954・1956・1958・1960)、日本国際美術展(1957・1959)などにも出品。また、1957年頃から駒井哲郎と交友し、銅版画を教えられたという。1960(昭和35)年7月21日東京都目黒区で逝去。この年の第24回新制作展に遺作室が設けられ12点が並び、翌1961年には古茂田守介遺作展(日本橋画廊)が開かれた。【文献】『造型版画協会第四回展目録』(1940)／『造型版画協会第四回展目録』(1941)／『古茂田守介 没後30年—ぬくもりと存在感』図録(目黒区美術館 1990) (三木)

小森素石(こもり・そせき)

昭和初期(1929頃か)、酒井川口合版と思われる「鴨」「鷺」「水鳥」「金魚」「鯉」「柿」などが題材の細判木版画の制作が知られる。「素石」については、土井利一氏のご教示による。詳細は不明。(樋口)

小山孝太郎(こやま・こうたろう)

1936年8月に京都の関西小国民社に於いて、西田武雄を講師に招いて開かれたエッチング講習会(8・9日 主催:京都エッチング協会 幹事:中井平三郎)の参加者に名を連ねる。同講習会には須田国太郎、北脇昇、安田謙ら28名が参加。【文献】『エッチング』47 (樋口)

小山栄達(こやま・えいたつ) 1880~1945

1880(明治13)年3月18日東京小石川に生まれる。本名政治。本田錦吉郎に洋画を学び、14歳で日本画を鈴木栄暁、その後小堀鞆音に学ぶ。1898年安田鞆彦・磯田長秋らと「紫紅会」を結成し、2年後今村紫紅が加わり、名称を「紅児会」と改める。異画会・日月会にも参加。1911年第5回文展に《兵燹》が初入選し、以降文展・帝展に出品して褒状を受ける。歴史画、武者絵を得意とした。1945(昭和20)年8月18日逝去。版画は、赤穂浪士の事跡をまとめた木版画集『義士大観』(義士会出版部 1921)に《吉良郎討入》1図を制作。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)／『山田書店新収美術目録』81(2008春) (樋口)

小山五郎(こやま・ごろう)

長野県北佐久郡大井に生まれる。長野県師範学校一部1

年に在学中、同校生徒による版画誌『樹水』第3号(1941)に《ストーヴ》を発表する。1945年同校を卒業。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950)(加治)

小山周次(こやま・しゅうじ) 1885~1967

1885(明治18)年6月27日長野県北佐久郡小諸町(現・小諸市)に生まれる。1900年小諸義塾に入学し、木村熊二・島崎藤村・三宅克己らに学び、1902年丸山晚霞の内弟子となる。1905年小諸教会でクリスチャンの洗礼を受ける。1907年太平洋画会研究所、水彩画講習所(後の日本水彩画会研究所)に学ぶ。1913年「日本水彩画会」の創立に参加、二科展や光風会展などに水彩画を出品し、二科会の事務を10年間務める。1940年代まで美術雑誌『みづゑ』に頻りに投稿、作品が掲載される。1927年から1945年まで成城学園高等科美術教師として美術教育に携わる。1942年小山が中心となり遺稿集『水彩画家丸山晚霞』(日本水彩画会)を刊行。晩年は宗教画を多く描き、1967(昭和42)年12月18日逝去した。版画作品は未見だが、成城学園美術教師時代にエッチングの制作を試みたことが『エッチング』46号(1936.8)の「答禮」に記されており、「今回偶然なことから美濃判の石版プレスを美術部の手に入れるやうになったので、本学園の深水正策氏を講師とし高等工芸の榎本次郎氏を顧問として六日間エッチングの講習を開いたので、入門第一試刷を君〔西田武雄〕に示した処、早速職業意識を発揮して何か書けとのことである。(略) 今後は石版、ヂンク版その他諸種の版画も試むる筈である。(略) 試みた感じをいふとエッチングといふものは案外簡単で又親味もありそうな気がする」と感想を綴っている。また『エッチング』55号(1937.5)には、翌1937年5月16日、小山指導のもと、成城学園アトリエに於いて「成城学園高等部エッチング紹介展(エッチング研究所より各作者のものを選び26点出品)」が開催され、当日参考出品の今純三の作品に多数の注文があったという記事もある。【文献】『エッチング』46・55／『小山周二展』図録(八十二文化財団 1999)(樋口)

小山春波(こやま・しゅんぱ)

1935年に刊行された木版画集『腕腕歌舞伎草紙』(錦絵会 9枚袋付)の制作があるが、詳細は不明。【文献】『山田書店古書目録』11(1988.7) (樋口)

小山卓一郎(こやま・たくいちろう)

長野県下水内郡の小学校教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号(1934.9)に《雪景色》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

小山千萬喜(こやま・ちまき)

1936年11月に開催された慶応義塾普通部生徒作品展覧会にエッチング《海岸》を出品。当時、小山千萬喜は普通部2年生で、『エッチング』第49号(1936.11)には「同校美術部にはすでに駒井哲郎君の様な将来有望なエッチャも出て居る」との記事がある。2年先輩に駒井哲郎がいた。【文献】『エッチング』49 (樋口)

小山寿夫(こやま・としお)

『エッチング』47号(1936.9)によると、1936年8月8・9日、京都の関西小国民社に於いて開催の西田武雄を講師

に招いたエッチング講習会に参加。また同年、中井平三郎が中心となって設立された「京都エッチング協会」の創設会員（1936.9 現在会員 19 名）に名を連ねる。1938 年 1 月頃にはエッチングプレス機を所有（『エッチング』64 には「京都版画家」の記載）し、同年第 5 回京都市美術展にエッチング《ウツボカズラ》を出品したと『エッチング』89 号（1940.4）の「研究所通信」では伝えている。【文献】『エッチング』47・64・89（樋口）

小山良修（こやま・りょうしゅう） 1898～1991

1898（明治 31）年 7 月 26 日に新潟県長岡市神田に生まれる。1923 年東京帝国大学医学部を卒業。戦前は病院の医員や幼稚園の医務嘱託など、戦後は東京女子医科大学の教授を勤め、定年退職後は名誉教授となる。1920 年から日本水彩画会研究所に学び 1926 年には日本水彩画会会員。1924 年不破章らと「蒼原会」を結成。戦前戦後をとって日本水彩画会に出品するが、光風会展には 1935 年頃まで出品、新制作展は 1955 年まで出品する。1929 年には光風賞を受賞。1941 年、1942 年と新制作派展で作家賞を受賞。また、1940 年の日本水彩連盟結成に参加するも 3 年後に退会。1989 年には長岡市美術センターにおいて「小山良修」展（1989.7.22～8.6）を開催。その他、『小山良修水彩画集』（美術出版社 1980）を出版。1991（平成 3）年 1 月 31 日逝去。版画では料治熊太主宰の版画誌『版芸術』第 9 号（1932.12）に賀状を出品。【文献】長岡市立中央図書館編『小山良修展』図録（長岡市美術センター 1989）／『20 世紀物故洋画家事典』（美術年鑑社 1997）／『創作版画誌の系譜』（加治）

是永 惇（これなが・じゅん）

大分の武藤完一が版画講習会を契機として発行した版画誌『彫りと摺り』第 5 号（1932）に《風景》、第 6 号（1932.12）に《嵐山にて》を発表。第 6 号では「是永 惇」となっているが、画風から同一人と判断した。当時、大分県師範学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

今 純三（こん・じゅんぞう） 1893～1944

1893（明治 26）年 3 月 1 日青森県弘前市代官町に生まれる。生家は代々津軽藩の御典医を務めた家柄であり、5 歳上の次兄は考現学で知られる今和次郎である。1906 年に東京に移り、独逸学協会中学校に進むが神経衰弱となり中退。医者になることを諦め、画家を志して 1909 年太平洋画会研究所へ入る。翌年葵橋洋画研究所に転じ、さらに 1912 年本郷洋画研究所に入所、岡田三郎助に師事した。1913 年の第 7 回文展に《公園の初秋》が初入選。1914 年の東京大正博覧会に《花と果物》、1917 年の第 5 回光風会展に《静物》がいずれも入選、そして 1919 年の第 1 回帝展でも《バラライカ》を入選させ、油彩画の代表作とした。油彩画に打ち込むかわら小山内薫の自由劇場や島村抱月の芸術座で舞台背景などを手がけ、また 1921～23 年には和次郎の紹介で資生堂意匠部にも勤務している。

1923 年、関東大震災で被災したのを機に帰郷して青森市に居を定め、版画に転向。まずは震災風景をエッチングに残し、以後主に銅版画家の技法研究に没頭。版画との機縁は、本郷洋画研究所で知り合った西田武雄にエッチングの初歩を学んで以来とされる。1927 年青森師範学校図画科嘱託となり、1928 年前後を中心に青森の風俗を報告する形で兄の考現学に協力、徹底した観察による風物

の採集、精緻かつユーモラスな筆致というスタイルは後の版画作品にも活かされることとなった。1933 年制作に専念するため教師を辞し、東奥日報社編集局嘱託となって銅版と石版による『青森縣画譜』に着手、県内の地勢や名勝、行事や風俗、文化を鳥瞰図や考現学的視点を交えて描き、翌年にかけて 12 集・100 点をまとめて代表作とした。1935 年にはエッチングによる大判の奥入瀬溪流連作を開始、48 点を構想するも 37 年に 9 点を制作した所で体調を崩し終了している。35 年 8 月西田らとともに青森市と木造町で「洋画及びエッチング座談会」を開催、また同年《エッチング小品集》にも着手（39 年までに袋付 3 点 1 組で 36 集・108 点を完成させたと推定）。1930 年代後半の活動はめざましく、1936 年川崎正人らと「青森エッチング協会」設立、1937 年から雑誌『エッチング』に「私のエッチング技法」を連載（1940 年まで、全 23 回）。1938 年には第 13 回春台展にエッチングを 18 点出品。同年西田・武藤完一・小野忠重・関野準一郎らを青森に迎えて青森市内と木造町でエッチング講習会を開催。さらに同年、岩手県に取材に赴いて大作《松尾鉱山精錬場》を完成させた。

1939 年青森市の菊屋百貨店で 60 点からなる「今純三 個展」を開催後、妻子とともに上京。西田の誘いを受け、銅版画家としての飛躍を目しての再上京であったが、実際は西田に紹介されたインキ製造所で工員として働き、心身を削ることとなった。1940 年の「日本エッチング作家協会」の設立に参加、第 1 回展から 3 回展まで出品。1943 年三國書房から『版画の新技法』を刊行、長年の研究に基づく多彩な版画技法を紹介するも、戦時下の貧しさと重労働のなかで湿性肋膜炎を発症、1944（昭和 19）年 9 月 28 日東京都中野区で逝去。『今純三作品目録』によれば生涯に 520 点もの版画を制作。指導者としても優れ、また清廉篤実な人柄が多くの人に慕われ、教え子には棟方志功・松木満史・鷹山宇一・下沢木鉢郎・根市良三、関野らがいる。なお戦後の 1950 年、兄和次郎により『版画の新技法』が東京ジープ社より再刊されている。【文献】『今純三作品集』（刊行委員会編纂＋東奥日報社発行 1982）／『日本近代銅版画と今純三展』（青森県立郷土館 1992）／對馬恵美子「今純三「エッチング奥入瀬溪流連作」考」『青森県立郷土館調査研究年報』22 号（青森県立郷土館 1998）／『今純三作品目録』（青森県立郷土館 1999）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景／銅版画と考現学の出会』展図録（渋谷区立松濤美術館 2001）／『緑の樹の下の夢：青森県創作版画家たちの青春展』（青森県立郷土館 2001）／對馬恵美子「今純三の銅版画の連作「小品集」について」『青森県立郷土館研究紀要』36（青森県立郷土館 2012）（西山）

近藤雅平（こんどう・がへい）

1929 年、横浜において八木澤英三・近藤雅平・福田信二の三人は版画誌『きくづ』（1929～1931）を創刊する。刊行が確認されているものは第 2 号（1929.12）から第 23 号八木澤英三追悼号（1931）のうち 7 冊で、特別号を加えると 9 冊である。当時の版画同人誌では教師の集まりが多い中、『きくづ』を構成しているのは会社社長をはじめ、会社員・医者・編集者として教師などの職業を持つ今で云う日曜版画家たちであり、版画家で英語教師の川上澄生も参加している。第 2 巻 1 号一周年記念号（1931.1）を編集する予定だった本多興花の子供の病

気により、急場しのぎで編集を引き受けた近藤は医者であり、休みに版画を制作。この記念号の編集後記には「どうやら1年を迎えた。何のさほりもなく回を重ねるにつれ同人の努力が見えて立派な作品集と成りつゝあることは同慶の至りだ」と記し、「卓上社展を見て」では「列陳された作品は流石に斯道の大家、実に堂に入れたものばかり、あまりに自分の小さいのに多少のテレ気味となつて、次の小学生の展覧会場に入った」と、恩地孝四郎、前川千帆などと自分を比べた感想を記している。版画作品は『きくづ』第2号(1929.12)に《椿》ほか4点、第3号(1930.1)に《人形》《女》、第6号(1930.4)に《花》《無題》、第8号(1930.〔6〕)に《朝鮮の女》、第10号(1930.8)に《炎天下》、第2巻1号一周年記念号(1931.1)に《黎明》《屠所の羊》《唐人船》と表紙絵、第2巻3号(1931)に《風景》《街頭所見》、特別号『羽子板草紙』(1930.1)に《年始廻礼》、『きくづ ALBUM』(1930)に《自画像》を発表。当時、横浜市中区石川町1-36に在住。【文献】『きくづ』2-1(1931.1)／『創作版画誌の系譜』(加治)

近藤浩一路(こんどう・こういちろう) 1884～1962

洋画・日本画の画家、挿絵画家。水墨画の魅力を現代に復興。1884(明治17)年3月20日山梨県南巨摩郡睦合村(現南部町)に生まれる。本名は浩(こう)。号は画蟲齋、土筆居など、俳人での俳号には柿(帯)腸を用いた。東京美術学校西洋画科に学び、藤田嗣治・岡本一平・池部鈞・田中良・九里四郎・田辺至・長谷川昇などが同窓で1910年3月卒業。すでに在学中の1907年の第11回白馬会展で入選。文展では1910年の第4回展で初入選。1918年赤饗会同人、日本美術院同人となる。珊瑚会にも所属。1915年には読売新聞の漫画記者となり、日本漫画会会員でもあった。1922年渡欧。1923年第10回院展出品《鶴飼六題》が代表作の一つ。1931年にパリで個展開催。挿絵・表紙絵にあっても水墨画の魅力を表現するもので独自のものがあつた。山本有三著・近藤浩一路画の『真実一路』は、1936～1937年『主婦之友』に連載、1938年新潮社からの単行本も出ている。また俳誌『曲水』の表紙絵も継続して描いた。版画は、風景の木版画があるが、年代の不明なものが多い。他に大正中頃かと推定の井上剣花坊の句に川柳漫画を付した木版画20枚がある。また、『近藤浩一路自選素描集』(芸艸堂 1941)に木版3葉が付されている。1962(昭和37)年4月27日逝去。【文献】『光の水墨画 近藤浩一路の全貌』展図録(練馬区立美術館 2006)(岩切)

近藤孝太郎(こんどう・こうたろう) 1897～1949

1897(明治30)年3月20日愛知県額田郡常盤村(現・岡崎市)米河内に生まれる。1915年愛知県立第二中学校を卒業し、東京高等商業学校に入学。在学中、若山牧水の門に入り詩歌雑誌『創作』の編集に携わる。1919年同校を卒業し、日本郵船に入社。翌年ニューヨーク支店に勤務するも、1921年退社。絵画・演劇などの見聞を深めるためフランスに渡り、退社前後から知る木下杢太郎、新たに知った児島喜久雄らと交友し、1922年帰国。帰国後は岡崎に住み、地元の青年たちと交友し、岡崎美術展の創設に尽力。1923年岡崎高等女学校の絵画の嘱託教員となるも、翌年退職。1924年文芸誌『草原』を創刊し、短歌を指導する。同年『グレゴイ夫人戯曲集』(新潮社)を翻訳出版。1925年には近藤の影響で小野英一・村松隆次・村松ふさの3人が始めた版画誌『版画』(1925.3・5 2冊)

の第2輯(1925.5)に木版画《接吻》《港》《異国人》と「初めて版画を試みるひとのために」を発表。同年、同誌と『草原』を合併させ、詩と版画誌『試作』(1925.6～1926.7 6冊)を創刊。第1号(1925.6)に《落日光》(表紙絵)《裸婦》《カラ》と「版画をやろうといふ人に(二)」、第2号(1925.8)に《秋の歌》《挿画「習作」》と「版画をやろうといふ人に(三)」、第3号(1925.12)に《落葉》と「版画をやろうといふ人に(四)」、第2巻第1号(第4号 1926.2)に《森にて》と歌「梅咲く頃」、第2巻第2号(第5号 1926.5)に《海に見える風景》、第2巻第3号(第6号 1926.7)に《風景》を発表。また、同年(1925)東京美術学校出身の杉山新樹・山本鎌太郎らと洋画の研究会「我々の会」を結成し、新人育成に努め、翌1926年に第1回我々の会展(4.14～20 岡崎市立図書館)を開催。近藤自身も油彩画20点を出品したほか、同展の特別出品として川上澄生・諏訪兼紀・平塚運一・深澤素一・森谷利喜雄・渡辺進の版画20点を並べている。また、東京の『第一小劇場』(松原英次主宰)の岡崎公演を企画し、装置などを手がけた。1927年には新たに洋画団体「新光会」を発足させ、若い人たちを指導。この頃から社会主義思想に傾斜し、1929年愛知県岡崎師範学校の生徒らと「社会科学研究会」を結成。1930年には活動家として拘留され、出所後は岡崎市史編纂に従事。1934年東京に転居。音楽新聞社に入り『音楽新聞』の編集長を務めるも、翌年退社。この頃、演劇・舞踏批評も手掛けている。1937年石川島造船所に入社。労務課産係として、青年工らに演劇・絵画・詩歌などを指導し、絵画サークルを作る。1941年『セザンヌ伝』(訳書 改造文庫 改造社)、1942年『兄ゴッホの思ひ出』(訳書 改造文庫 改造社)『働く者のための絵画』(勤労青年文化叢書 東洋書館)、1943年『働く者の詩』(東洋書館)などを出版。1945年4月に反戦言動により検挙されるも、終戦により釈放。1947年岡崎文化協会の発足に尽力。同年全日本産業別労働組合会議の文化部に勤務。日本美術会に属する。1949(昭和24)年11月6日東京で逝去。翌1950年の第3回日本美術会日本アンデパンダン展に遺作《岡崎公園》など5点が並んだ。【文献】桃山将「試作」のことも一版画雑誌の誕生一『古本屋の蒔蓄一店主たちの書物談義一』(燃焼社 1997)／小野忠重「近藤孝太郎・働くものの絵」『版画の青春』(形象社 1978)／福岡寿一『一筋の道一近藤孝太郎研究一』(東海タイムズ 1979)／『近藤浩太郎とその周囲』展図録(岡崎市美術館 1983)(三木)

近藤伍平(こんどう・ごへい)

1933年7月西田武雄エッチング研究所に於いて開催の京橋区教育研究会図画手工部のエッチング講習会(14日)に参加。当時、明石小学校に勤務。【文献】『エッチング』10(樋口)

近藤五郎(こんどう・ごろう)

1936年の第5回日本版画協会展に石版画《横浜埠頭》《不忍の池》を出品。【文献】『第五回日本版画協会展覧会出品目録』(1936)(三木)

近藤紫雲(こんどう・しうん)

挿絵画家として『講談倶楽部』『キング』誌などで活躍。1935年『名作挿画全集』予約パンフレット広告に「挿画界の中老として一頃は永洗張りの線の優艶な美人画で

鳴らしたものです。鬻ものでも現代ものでも自由に描きこなす暢達な作家」とある。版画では、『浮世絵美人合』シリーズ(大判錦絵 1924)の《六月 菖蒲》《十一月初雪》を担当。『大正震災画集』(横判錦絵 絵巻研究会 1926)三集の《豆子小坪震後津浪の襲来》、四集の《大磯附近列車の轉覆》を担当。【文献】『名作挿画全集』予約パンフレット広告(1935)(岩切)

近藤重房(こんどう・しげふさ)

明治の石版印刷業界誌『虹』第1巻9号(1908.10)に石版画《秋の山道》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

近藤 茂(こんどう・しげる)

明治の石版印刷業界誌『虹』第1巻8号(1908.9)に石版画《三保の渡》《小林高晴》《杉の茶屋》《秋既闌矣》《秋風来る何そ夫れ速なる》《習作図》、第1巻9号(1908.10)に石版画《井の頭》《朝寒む》《橋畔の秋》《木枯》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

近藤紫行(こんどう・しこう)

吉川観方が中心になったと思われる新版画サークル「洛陽版画協会」会員の一人。洛陽版画協会も近藤紫行も詳細は不明だが、1913年頃より関西での版画の復興を目指し、関西で初めて木版雲母摺の大錦判役者絵を刊行して新版画の作家として知られるようになった吉川観方は、1923年9月17日付『日出新聞』記事談として、「近来版画の制作に没頭して居ますので、帝展出品の制作はやって居ません。(中略)私達の試みは形式を在来の浮世絵にとって気分は何処迄も現代として新しいものを作って見たいと思ひます。(中略)私達のサークルは洛陽版画協会として、三浦瑠観・近藤紫行・田中蛙華・由井覚郎の諸君が試みて居ります」と述べている。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12(京都府立総合資料館 1974)(樋口)

近藤主計(こんどう・かずえ)

長野県下水内郡の小学校教師を中心とする下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』(1934~1938)の第3号(1936.7)に《賀状》、第5号(1938.3)にも《年賀状》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

紺野浦二(こんの・うらじ) ➡川喜田半泥子(かわきた・はん でいし)

近野信次(こんの・しんじ) 生年不詳~1938

山形県に生まれる。1928年か、東京美術学校彫刻科木彫部に入学。在学中は校友会版画部の活動に参加し、木版画を制作。1930年11月の版画部展(28~29 東京美術学校)に《湖》《夏》《待合室》を出品したほか、1932年6月の第2回日本版画協会展に木版画《開幕》が初入選し、7月の第14回版画部展(16~17 東京美術学校)にも出品したことが確認されている。1933年3月同校彫刻科木彫部本科を卒業。9月の於巴里日本現代版画展覧会準備並第3回日本版画協会展にも《御旅籠》《紙芝居》が入選したが、平塚運一は「近野信次氏の諸作には缺點はあるが、何か特殊なものが動いてみてよるしい」(「於巴里日本現代版画展準備並第三回日本版画協会展に就て」『みづゑ』344)と評している。1938(昭和13)年7月4日逝去。【文献】『みづゑ』344(1933. 10)／『校

友会月報』29-7(東京美術学校 1931.1)／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科』(同窓会名簿編集委員会 1972)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

紺谷英儀(こんたに・えいぎ) 1908~1973

1908(明治41)年富山県高岡市に生まれる。富山県立工芸学校木工科を卒業し、1926年か、東京美術学校彫刻科木彫部に入学。在学中、校友会版画部の創設に参加し、1928年2月に構内で開いた「椎ノ樹第1回創作版画展」(17~18)に木版画《裸女一》《裸女二》《顔A》《顔B》、第3回展(6. 15~16)に《下志津の平原一部》《風景》《首》、1930年11月の展覧会(28~29)にも《首》《雨の夜道》他1点を出品していることが確認できる。1931年同校彫刻科木彫部本科を卒業。同年の第12回帝展に木彫《無》が初入選。以後、官展を中心に第13・14回帝展(1932・1933)、第3・4・5回新文展(1939・1941・1942)などに作品を発表。戦後も1946年の第2回日展を始め、第3・5・10回(1947・1949・1954)の日展などにも出品したほか、彫刻団体「創型会」(1951結成)の同人になっている。1973(昭和48)年逝去。【文献】『校友会月報』26-8、27-3、29-7(東京美術学校 1928.3、1928.7、1931.1)／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『日展史資料I』文展・帝展・新文展・日展 全出品目録 明治40-昭和32年』(社団法人日展 1990)(三木)